

---

# 七つの鍵の物語 - 【神話】

上野文

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

七つの鍵の物語 - 【神話】

### 【Nコード】

N2373D

### 【作者名】

上野文

### 【あらすじ】

世界樹に至るものはすべての願いを叶えられる。門を開く七つの鍵が創られた時、世界は破滅への道を走り出した。世界の救済を望む少女、阻もうとする少年達。どちらが正しく、どちらが間違なのか。答えは戦乱の光芒の中に……

## 第一話 黄昏

### 七つの鍵の物語 - 【神話】

1

聖歴6666年、世界は滅びに瀕していた。

かつてない規模の戦争が、世界中を巻き込んで、9つの大陸とあらゆる国々をその業火でもって焼き尽くしたのだ。

戦争ならば、有史以来幾度となくあった。

侵略戦争、独立戦争、分裂戦争、テロとの戦い、革命、内乱……

まるで輪舞曲のように悲劇は繰り返され、けれど、それで世界が滅ぶことはない。

なぜなら、戦争もまたひとつの外交手段に過ぎず……

何の目的も無く軍事力を行行使し、私怨で殺戮や強奪を繰り返す国などありえないからだ。

ごく、一部を除いて。

終焉のはじまりは、簡単だった。

爆発的な人口増加による、食糧不足とエネルギー問題解決の為に、世界同盟主導で行われた、“一大魔道プロジェクト”七鍵計画”。

魔法というエネルギーの根幹を探るこの計画は、研究者達の予想を越えて、世界のあり方そのものを変革……否、崩壊させるほどの成果をあげてしまった。

宇宙の根源であり、あらゆる生命の礎であり、太極の一たる存在、偉大なるトネリコの木、『世界樹』へと至る虹の門を研究者達は開いてしまった。

研究者達が踏み込んだのは、わずかに一瞬。

その刹那に、広大な砂漠が緑なす山となり、密林が平野へと姿を変え、金や貴金属が空から降り注ぎ、そして、10を越える国が洪水や地震、噴火によって消滅した。

全世界規模で吹き荒れた未曾有の大混乱が、”七鍵計画”に参加した研究者達の願いを叶えたものだとして理解したとき、この世界は血塗られた終末を迎えた。

ただの人が、全知全能の神となるのだ。

その魅力は、その狂気は、その信仰は、あらゆる理性と善意を駆逐して、暴走した。

当たり前のことだが、人は全能神になれるような、成熟した精神の持ち主ではない。

そもそも、世界同盟という組織自体が末期的状況にあった。

金銭や軍事力による恫喝、ハニートラップを含めたロビー活動がまかり通っていた。

同盟会議議長は、小国から選ばれる事を通例としていたが、彼らは容易に金銭や権力に流されて、審判役には荷が重かった。

議長ばかりではない。同盟運営の委員会や委員も同じだった。

人道支援の名目で、軍事費に転用されることをわかっていながら、民衆を苦しめる独裁者に援助する世界人道機構。

気に入らない国を人権侵害の名目で恫喝するためだけにある、『『本当の人権蹂躪』で先進国から非難される、名だたるテロ国家や軍事独裁国家が理事を務める世界人権会議。

そもそも財政からして狂っているのだ。

世界同盟を主導する主要国家のうち、5指に入る、ヴァン神族、人間族の巨大国家が貧乏を理由に運営金の拠出を拒否。

アース神族の最大の主要国家のひとつと、主導国家でもなんでもない人間族の小国のひとつが、世界同盟予算の50%近くを押し付

けられるありさま。

世界各国はひび割れた氷上のテーブルに座り、本来は自分達のものでない金を巡って、喧々囂々の罵りあい終始する。

終わっていた。

あらゆる意味で、この世界は末期にあった。

それでも、希望はあったかもしれない。

人間族の小国で行われた会議で、アース神族、ヴァン神族、白妖精、黒妖精、小人、巨人、人間の七種族が、一致協力して環境問題に取り組むと、議定書に調印した。

科学技術、魔法技術の技術革新は、百年前に『半世紀後には枯渇する』と予言された黒い水を、途切れることなく使い続けることを可能にした。

深海で発見される新しい燃料素材、自然との共生を図る様々な新技術。

人々は乗り越えただろう。

貧困も、環境も、国々の摩擦すらも、妥協し、衝突を繰り返し、時には手を取り合って。

そんな平凡な可能性は、”七鍵計画”によって摘み取られてしまった。

あらゆる人が、国が、全能の支配者になろうと、扉を開く鍵を追い求めた。

流星を落とし、雷雨を招き、時空間を歪め、そんな禁呪が無遠慮に行使された。

どれだけの者が門に至り、どれだけの願いが叶えられたのか、わからない。

ただ、奇跡が起こるたび、戦争はより激しさを増し、遂には、鍵だけではなく、門の奪い合いに発展した。

『世界樹』へと至る虹の門は、大地を流れるエネルギーライン、地脈の集中する特異点、“龍穴”にて顕現する。

それを知った者たちは、躊躇なく、敵国の大地を、島を、大陸そのものを消し飛ばした。

9つの大陸は次々と海へと没し、残されたのは“中つ国”と呼ばれる人間達の大陸、ミッドガルドのみ。

7つあった鍵もまた戦の中で失われ、二本を残すのみとなった。

地脈の活性化と共に、ミッドガルドの中央に現れた虹の橋、『世界樹』へと至る門を巡り、すべての終わりであり、はじまりとなる戦いが始まるうとしていた。

大陸の中心に、天と地を貫く巨大な樹が、隆々とそびえたっていた。

山よりも大きく、太く、成層圏すら越えて、宇宙へと伸びる巨大な幹。

木が揺れるたびに、緑の葉が揺れて、雨の様に落ちてゆくさまは、身震いがするほど荘厳だ。

「終焉には相応しい。そうだろう？ エインフェリアルつ、偽りの神々よ！」

世界樹の下に浮かび上がる、小島ほどもある巨大な黒い船の甲板で、黒い衣を羽織った、黒髪の少女が叫んだ。

漆黒の瞳が黄金に染まり、彼女の小さな体軀をめぐり、燐光を帯びたルーン文字が螺旋を描いて輪舞する。

「巨人族の魔女め。我らが祖国を滅ぼした報い、今こそ受けてもら

う！」

「これは、神罰だっ」

アース神族が駆る、巨大な人を模した魔術戦闘機……  
第四位契約神器、F-22『英雄』<sup>エインフェリアル</sup>が編隊を組んで、少女へと強襲した。

世界最高のレーダーと、長射程魔術砲、飛翔誘導弾を持ち、何よりも『完璧な』光学迷彩を可能とした最強の機体だ。

灰色の巨大な戦士達は、次々と青い空へと姿を消しこんでゆく。  
次の瞬間、目もくらむような閃光と、誘導弾の爆撃が、少女の立つ甲板を焼き払った。

「ヤッホウ！」

空へと姿を溶かしたまま、歓声をあげるアース神族の兵士達。  
だが。

「無駄だ。無駄なんだ」

甲板には傷一つない。

少女もまた、ルーン文字の螺旋をまとったまま、爆撃前と変わらぬ姿で立っていた。

否、違う。

ただひとつ、彼女は己が身長を越える、銀の穂先で飾られた、漆黒の槍を持っていた。

「この滅びは誰にも止められん」

少女の金の魔瞳が、見えないはずの兵士達を射抜いた。

「ガングニール！」

少女は呼ぶ。彼女の相棒たる愛槍。

七つの鍵の一つである、第一位契約神器の名を。

「祖国の後を追うがいい。」

次元の狭間、大空洞へと堕ち消えよ」

ギヌンガガッ

少女が槍を投擲する。

漆黒の雷の如く、槍は飛び去り、すべての魔術戦闘機を刺し貫いた。

「こんな、有り得ないっ」

「母さんっ……」

青い空を、赤と黒の爆炎が彩る。

すべての敵を滅した槍は中空にて消失、少女の腕の中へと轉移した。

「アハハッ。アハハッ」

少女は笑う。

黒い髪を、黒い衣を、金の瞳を揺らして、哄笑する。

その時、彼女の周囲を舞うルーン文字が、赤く揺らめいた。

「なんだ。次は大陸間弾道弾か。

アース神族か、ヴァン神族か知らないが、無粋な真似をする」

少女が、さっと、腕を横に払った。

黒い槍が増殖する。

ひとつ、ふたつ、みつつ。……ひゃく……いっせん……

止まらない。一秒も待たずして、甲板を埋め尽くした槍は、宇宙から飛来する死の災いを撃ち落すべく飛び立った。

青空の果てで、太陽の如き輝きが地を照らし、やがて灰色の雲へと変わり、消えた。

「誰にも我を止められぬ。

我が槍が貫くは、因果。運命そのものなのだから」

そうだ。止められる者などいるものか。

可能性があるとすればただひとり。

この地上に残された、もう一つの第一位契約神器の使い手のみ。



「だから」

少女は待っていた。

最大の宿敵を。

最愛の宿敵を。

最後の、家族を　　。

「……来たか」

少女の周囲を舞うルーン文字が橙に染まり、燐光がはらりと零れる。

魔術で強化された少女の瞳は、地平線の方こうに、こちらを目指して飛来する小さな白い船を捉えていた。

「待っていたよ、ルドウィン。私の可愛い、義弟　　」

2

高速巡洋艦スキーズブラズニル。

光の帆をなびかせて、世界樹を目指して大空を渡る白い船の名だ。ミッドガルド東端の小国にして、世界で唯一続いた2千年の歴史を持つ王家を戴くガートランド王国が、大戦の前に防衛艦隊の中核として建造した歴戦の艦だ。

武装こそ特に目立った点はないものの、世界最高峰の速度と機動性を有し、神族や妖精族をして変態的と賞賛したほどの恐るべき頑健さとを復元性をもっていた。

特に、ダメージコントロールにおいては比肩するものなしと謳われて、大戦中に2度も中破しながら、未だに現役で戦場を闊歩している。

ただし、問題がなかったわけではない。

本来軍用装備とは、量産性こそが最大の武器にして、最重要の条

件だ。

ところがこの小国は、昔から職人芸に長ける代わり、量産性をほとんど考慮しなかった。

年間20両しか導入されない主力戦車とか、主力戦車より高価な軽装甲車とか、他国の軍事専門家が聞いたら泣くような非常識が平然と行われていた。

国家予算における軍事費の割合が低すぎて、量産するより研究費に回した方がマシという理由もあったのだが。

つまり、スキーズブラズニルの場合も、名船だから2度の中破を潜り抜けたというより、国の財布にはもう一隻作る余裕なんてどこにもなかったから、無理を承知で使われ続けたという分析の方が正しい。

だが、たえそうであつたとしても、この船がガートランド王国にとって、ある種の期待を背負った象徴であつた事は間違いない。

激戦区に何度も投入され、幾度も傷を負いながら生還した、戦乙女に愛された艦。

そして今は、”神剣の勇者”が駆る、世界最後の希望……。

「どうだ、アザード？ 衛星との通信、回復したか？」

白い長剣を携えた黒い髪、黒い瞳の青年が、ガチャガチャと慣れない手つきで操作台にルーン文字を打ち込みながら、艦長席に座る自分より頭ふたつ高い、青い瞳に眼鏡をかけた赤毛の少年に尋ねた。「うん。どこかの国が、熱核呪法の弾道弾使つて、黒衣の魔女<sup>テラー</sup>に迎撃されたみたい」

赤毛の青年の報告に、オペレーター席に座ったウェーブのかかった白金色をした髪と、青灰色の瞳もつ少女が憤りの声をあげる。

「熱核呪法！？ 馬っ鹿じゃないの。」

環境汚染とか後先とか何考えてるのよ。

そんなもので、あの怪物を倒せるわけじゃないじゃない」

少女の怒声に、黒髪の少年はみけんに皺をよせる。

「フローラ。アザードに怒ったってしょうがないだろ。」

あと出来れば、ひとの義姉をバケモノ呼ばわりはやめて欲し……」

「うっさい。ルドウインは黙って仕事する！」

はい、と。  
一喝されたルドウイン・アーガナストは、うな垂れたまま、無言で操作台に向かう。

”神剣の勇者”なんて恥ずかしすぎる異名は、誰がつけたのだろうか。

そんなものはいらないから、この勝気すぎる幼なじみに対抗できる何かが欲しかった。

たとえば、階級とか。

「アザードっ、第三内燃機関にトラブルが起きてる。」

あたし見てくるから、この艦墜落とさないでよねっ」

おい、アザードは代理とはいえ艦長で、お前より階級が上だぞ。

そうツツコミを入れようとしたルドウインだが、震え上がるほど怖い瞳で睨まれて沈黙した。

10年以上の付き合いだが、改めて理解する。

この3人での限り、階級とか関係なく、フローラ・ワーキュリに逆らえるヤツはいない。

ああ、恐るべし腐れ縁よ！

ぷりぷりと怒ったフローラが印を結び、彼女の姿が消える。おそらく内燃室へと転移したのだろう。

今、スキーズブラズニルに残った魔術師はわずかに三人。  
王国自衛軍大佐、万能魔術師、アザード・ノア。

王国自衛軍中佐、空間魔術師、フローラ・ワーキュリー。  
王国自衛軍大尉、火炎魔術師、ルドウィン・アーガナスト。

ルドウィンは、なぜか涙が出てきそうになったが、我慢しなければならなかった。

ああ、戦時特例とはいえ、魔術士官学校を同期で出て、この明確な階級の差は何でしょう？

やっぱり才能？ 才能の差ですか、自分どうあってもこの幼なじみ達に勝てませんか？

陰鬱な表情でルドウィンが落ち込んでいると、艦長席のアザードが気遣うように声をかけて来た。

「ルドウィン。やっぱり、怖い？ あのひとと戦うのは」

「心配するな、と言いたいのが、やっぱり怖いな。」

俺達は三人とも、昔から姉さんには勝てなかった」

今、黒衣の魔女と呼ばれる少女<sup>テラ</sup>。

アース神族を滅ぼし、世界そのものを滅ぼそうとしている、そう伝えられる巨人族の末裔。

彼女と、今この艦橋にいる三人は、顔見知りだった。

いや、顔見知りどころではない。アザードとフローラにとって、彼女は幼なじみであり、ルドウィンにとっては……。

「ま、敵を知り、己を知れば、百戦百勝ってね。」

俺達は姉さんをよく知ってるし、姉さんは俺達のことをよく知ってる。

あとは、他の要因が勝負を決めるだけで、どうよ、アザ。この艦の現状は？」

「うん。そうだね……」。

こちらは、巨人機、機竜とも艦載機はゼロ。

機関砲も、垂直誘導弾発射機構も、残弾ゼロ。

主砲は全壊、副砲も半数が沈黙、内燃機関にトラブル。

燃料は片道分、更に正規の搭乗員のうち、乗っているのはわずか

に3名」

何か、重い沈黙が、艦橋の空気を凍らせた。

その気まずい空気を、ルドウインは空元気で無理やり振り払った。

「よっし、笑いが出るほど絶好調。

で、あちらさんは？」

「衛星フレスベルグからのデータ分析によれば、向こうも艦載機は使い切ってる。

でも、要塞戦艦ナグルファルが健在で、対空砲、対地砲、併せて50門以上……。

七つの鍵のひとつで、第一位契約神器ガングニールによって、異なる次元、虚数空間からエネルギーを抽出されるから、燃料も、ジエネレーター直結の砲台の残弾も、ほぼ無限……」

わかっていたこととはいえ、絶望的な戦力差だった。

もう負け確定！ といった不利っぷりはいつそ見事だ。

航空支援なしで戦艦単独で突撃するくらい馬鹿げた話だ。

犬死に行く様なもの。

だから、置いてきた。

話し合って。何名かとは殴り合って。

戦友たちを、残りの乗員全員を置き去りにした。

本当は、この艦に、否、王国自衛軍に、正規の軍人なんて残っちゃいない。

皆、国を守るために、家族を守るために、恋人を、友人を守るために戦い、散っていった。

ガキさえ軍に動員しなければならぬほど、王国も、他の国々も追い詰められていた。

それが出来なかった国は？

……当然の如く、殺戮され、略奪され、強姦され、消えていった。

当たり前だ。

飢えた民しか持たぬ狼のような国々に、身を守るすべすら持たぬ羊の国が何をできる？

そんなことは、ちゃんと歴史を振り返れば明白な事だ。

理想論なんて、平和な場所、平和な時代でしか通用しない。

だから、ルドウィン達は戦乱に身を投じた。

国のためとか社会のためとか、そういう立派な動機じゃない。

そうしなければ、自分も、大切なひと、誰一人守れなかったからだ。

その為に、国を、社会を守る軍人となった。

たとえ、かつて愛した、愛する義姉と敵対しても。

「くつらいわね。何がらにもなく落ち込んでるのよ？」

悲壮感に淀んでいた艦橋に、ほのかな香水による花の香りと、高い声が響いた。

「あたし達が負けるわけ無いでしょう？」

こつちには、王国で最も幸運な船と、最も激戦を潜り抜けた艦長（代理）と、最も悪運の強いバカと、このあたしがいるんだから「なんか、ひとつだけ褒められていない気がするのは気のせいでしょうか？」

世界は不平等で不公平です。

そう、フローラの前で、ルドウィンは声を出さずに胸の中で泣いた。

「出港前に説明したけど、王国の参謀部にしては、今回の作戦は英断よ。」

黒衣の魔女の持つガンゲニールは、因果律と時空間に干渉する。

だから、大陸間弾道弾を撃とうが、巨人機や機竜で爆撃しようが、過去と未来を書き換えられて”無かったこと”にされる。

通常の魔術兵器じゃ、絶対に斃せない」  
さらに、と、空間魔術師はつけ加える。

「黒衣の魔女の攻撃は絶対必中。

光学迷彩で隠そうが、超高速機動で回避しようが、全て無駄。  
因果律を操作して、”当たった結末”を適用されるんだから、1  
00%撃墜されるわよ。

”外れずのガングニール”の異名は伊達じゃない。

標的がどれほどいても、虚数空間から同じだけのガングニールを  
呼び出せばいいだけだから、飽和攻撃も通用しない」

ゆえに、黒衣の魔女は無敵となった。

アース神族、ヴァン神族、白妖精族、黒妖精族、小人族、人間族。  
あらゆる種族の、あらゆる国々の軍を壊滅させる、まさに怪物。

誰にも止められない。

止めるものなどいない。

ただひとり、同じ第一位契約神器の使い手を除けば。

「でも、ルドウインの持つ、魔剣レヴァティンだけは別。

白妖精族の女王が言ったとおり、その炎の剣は、世界樹の敵とし  
て生み出された。

あらゆる魔法、あらゆる魔術、あらゆる生命、あらゆる可能性を  
否定する、究極の神器。

必殺必中の一撃だろうが、無限量の飽和攻撃だろうが関係ない。  
運命を否定し、因果を否定し、すべての可能性を終局、無へと統  
合する。

この宇宙だって、いつかは終わるのよ。

死を、滅びを迎えない存在は無い。

ルドウインだけは、黒衣の魔女の因果律操作を否定できる」

それは、ただ一時的な条件において、互角というだけだ。

ルドウインの体力も精神力も有限なのに対し、黒衣の魔女は無限にエネルギーを吸い出せる。

戦い続けられれば、いつかは負ける。

「本来、莫大な魔力を消耗する因果律操作と時空間干渉を、黒衣の魔女はガングニールによって実現した。

でも、いくら巨人族だからって、黒衣の魔女の身体は一つしかないし、彼女自身の魔力も有限なのよ」

だから、何かが、彼女の代わりにガングニールを使って、虚数空間からエネルギーを抽出しなければならぬ。

「要塞戦艦ナグルファルが、彼女の下僕となって、無限の魔力をくみ出している。

ならば、あれを落とせば、黒衣の魔女は戦闘か、エネルギー抽出に専念することを余儀なくされる」

それが、残された唯一の勝機だ。

「ルドウインが黒衣の魔女を足止めして、その隙にアザードが時空崩壊魔術弾を積んだこの艦を要塞戦艦に近づける。

で、あたしがアザードを連れて転移して、自動操縦で突撃して吹き飛ばす。

あとは、ルドウインが黒衣の魔女のガングニールを破壊すれば、めでたしめでたしよ」

「あっさり言うなあ」

簡単なことじゃない。

ここに来るまでに、武装のほとんどを失ったスキーズブラズニル



で、ナグルファルの懷に飛び込むのは並大抵の事ではない。

たとえ成功しても、転移による離脱が遅ければ、アザードとフロ  
ーラの命は無い。

何よりも、ルドウィンが黒衣の魔女を押さえられるかは、非常に  
厳しい。

それでも。

「出来るよ。ルドウィン、僕達なら」

赤毛の青年が微笑む。

「悪い魔女を斃して、あたしたちのお姉さんを取り戻しましょう？」  
プラチナの髪の少女が強気に笑う。

「ああ。皆でもう一度、あの森にピクニックに行こう。

紅茶とサンドイッチを用意して、4人で、もう一度……」

そして、黒髪の少年もまた強くうなづいた。

その為に、その為だけに、ルドウィン・アーガナストは、この魔  
剣を抜いたのだから。

甲板から見上げた空は、透き通るように蒼かった。

ルドウィンは文字を紡ぎ、魔術を織って、炎の翼を背に呼び出し  
た。

目指すは世界樹。

その下にいるだろう、最大の、最強の宿敵。最後の……家族。

「来たか。神剣の勇者<sup>ヒーロー</sup>。王国の狗」

巨大な要塞の甲板に立った、黒い槍を構えた黒衣の少女が、歓喜  
とも憐憫とも憤怒とも判別のつかない複雑な表情で出迎えた。

「来たよ。黒衣の魔女<sup>テラー</sup>。邪悪な巨人」

炎の翼をはためかせた、白い長剣を携えた少年が、愛情とも、憎悪ともつかない、複雑な表情で飛来した。

「姉さんを、ヴァール・ドナクを帰してもらおう」

「その女は死んだ。とうの昔に殺された」

青い空と、燃える大地の間を、巨大な葉がひらひらと舞い落ちる。

「決着をつけよう。我が宿敵!!」

魔女が黒い槍を投げ、勇者が白い長剣で切り払う。

因果律と時空を歪めた、異形の剣戟をきっかけに、物語のはじまりにしておわりとなる神焉の闘いが幕をあけた。

## 第一話 黄昏（後書き）

拙作をお読みいただき、ありがとうございました。

## 第二話 闘争

3

「この娘はヴァール。

ヴァール・ドナク・アーガナスト。

今日から、私達の家族だよ」

そう言つて、父が連れて帰つてきた少女は、まるで人形のように美しかった。

濡れた鳥羽を思わせる艶やかな黒髪と瞳、陶磁器のように透き通つた白い肌。

玄関を抜けて、あばら屋のような我が家へと踏み入れた少女に、ルドウインは魂を奪われた。

黒いドレスに身を包み、毅然と立つ姿を孤高だと。

ただ、圧倒されたのだ。

外交官を引退し、農業を営む父がどういう理由で彼女を引き取つたのか、ルドウインにはわからない。

後年、彼が仲間達とともに調べたとき、すでに戦火の中で資料は悉く焼失し、あるいは故意に破棄されていた。

”巨人族”。かつて世界を相手に戦い、”邪悪”として滅ぼされた、強大な魔力と高度な魔道技術を持つ種族の生き残り。

そんなことを、幼いルドウインは知らなかったし、知る必要も無かった。

ただ姉が出来た事に反発し、甘え、……いつの間にか好きになっていた。

それは、たとえば幼なじみのアザードとフローラが互いに抱いた

ような、恋愛感情ではなかったけれど。

思慕であり、憧憬であり、何よりも愛情だった。

学校が終わると、4人は連れ立って森に向かった。

姉はよくサンドイッチを作ってくれて、湧き水の傍でたわいもない話をした。

学校であつた事。楽しかった事や腹立たしかった事。そんなことを。

ルドウィンが怪我をしたり、アザードが落ち込んだり、フローラが癩癧を起こすと、よく姉は慰めてくれた。

木の葉が人形のように集まって踊ったり、水がシャボン玉のように浮かんだり。

目の前で起こる信じられない風景に、三人は心を震わせ、見惚れたものだ。

「お姉ちゃんは、魔法使いなんだ」

だから、いつしかルドウィンは、アザードは、フローラは”魔法使い”になろうと決めていた。

誰かを幸せに出来る、そんな魔法使いになろうって。

4

「ガングニール！」

燃える大地から蒼穹の空へと伸びる巨大な世界樹。

その下にそびえる要塞のような戦艦の甲板から、少女は黒い槍を投擲した。

「レヴァティン！」

「（……<sup>マスター</sup> ケケケ。盟約者、任せな）」

少年は槍の速度を無意識下で計算し、白い剣を振るって迎撃する。焰が陽炎の如く燃え上がり、刹那の交差のうちに、ガングニールによつて『槍が少年を貫く未来』が確定され、同時にレヴァティンが『確定された未来を消滅』させた。

二人の戦いは、槍と剣の交錯などではない。

未来を捻じ曲げ選択し、選択された未来を否定し、否定された未来を捻じ曲げ、捻じ曲げられた未来を再び無に帰す。

そんな無茶苦茶な魔術の罅迫り合いだ。

次元を狂わせる魔術の応酬を、槍と剣を、何合重ね合わせただろう？

気がつけば、ルドウインは度重なる魔術の応酬でげっそりと消耗し、ヴァールはそんな義弟を悲しそうに見つめていた。

「もう、やめよう？ 我は、お前を傷つけたくない」  
「っ」

ルドウインは、剣を構えたまま、息を吐いた。  
なんとということだろう。

自分は姉と戦っているというのに、世界の命運が決まるというのに。

空は、涙一つ流さずに、美しい青空を広げている。

ここは、きっと、天に最も近い場所。

山を越え、雲をも越えて、地を見下ろし、空を渡る。

「見る。ルドウイン、世界はこんなにも綺麗だ。」

砲台で埋め尽くされた無骨な船の上で、義姉は謳った。

「他には何もいない。

お前がいて、我がいる。

それで十分ではないか？」

「……………」

ルドウインは、炎の翼をはためかせ、地を見下ろした。  
赤く、黒く、血を流し、燃えて、焼かれた大地を。  
地平線の向こう、青い海に飲み込まれた8つの大陸を。

「姉さん、なぜだ、なぜなんだ……」

喉奥から絞り出されたのは、問いにもならぬ問いかけだった。  
なぜ、自分達の前から姿を消したのか。  
なぜ、ガングニールを手にしたのか。  
なぜ、自分達は争わねばならないのか。

「ルドウイン、お前だって見てきただろう。」

この美しい世界は、あんなにも不平等で不道德で不誠実だった。  
神々や白妖精を騙る一部の国々が、人間を、黒妖精を、小人を、  
奴隷として使役する。

そんな世界が正しいはずは無い」

だから、百年前、巨人族と呼ばれた国が、神々の支配する世界へと反乱を起こした。

あまたの軍を打ち破り、人間を、黒妖精を、小人を、解放し、鉄道や道路を結び、水道を整えた。

学校を建て、病院を作り、強盗や殺人者を取り締まり、神々に対抗できる国々を作ろうと戦った。

そんな夢物語が叶うはずもないのに。

巨人族は敗北した。

戦時条約で、互いに民間人への殺戮を禁じたにもかかわらず、神々はあらゆる禁呪を用いてこれを焼き払った。

赤子も老人も容赦なく！

「我々は敗北した。」

それはいい。それは我らの責だ。

だが、勝利した神々は、すべての邪悪を我らに押し付けた」

風が吹き、世界樹の葉がゆらゆらと舞う。

ルドウインからは、伏せられた義姉の瞳は見えない。

「そして、人間族の国は、掌を返すように我らを殺戮し、血祭りにあげて勝利の凱歌をあげた！」

そんなことはない！

絶叫をルドウインは飲み込んだ。

確かに、そのように下衆な真似をした国は存在した。

だが、それは、人間族の総意などでは決して無い。

あらゆる史実を嘘で固め、すべての責任を他国に転嫁し、弱者を踏みにする事のみを生きがいとするような最低最悪の一部の国が行ったことだ。

「それが敗者の責だというのなら諦めよう。」

だが、我らのみが悪なのか？

戦をはじめたことが邪悪というのなら、神々は正しいのか？

軍事力を持つて侵攻し、大地を、資源を奪い、人間や小人を家畜として酷使した、その行為は正しいのか？」

神々の中に、自分達だけが優れた存在であるという傲慢な考えがなかったとは言わせない。

だからこそ、唯一神々と戦える力を持った巨人族を障害として排除した。

そして、一部の人間族の国は、その弱みに付け込んだ。

「我々の父母は、受け入れたよ。  
それが贖罪と信じて。」



祖霊を祭る事を止めた。

土地を放棄し、武器を捨て、作物を、資源を、研究を捧げ続けた。だが、彼らは我々から奪い続けるばかりだった！」

当たり前だ。

長剣を手に、ルドウインは息を整える。

謝罪を、賠償を。

壊れた蓄音機のように繰り返し続けた連中は、本当に謝罪や償いを欲していたわけではない。

本当に、彼らが償いを欲したのなら、彼らの主張する一都市の戦闘での犠牲者が10万単位で年々と増え続けたり、強制的に連行されたと主張する、戦後にはわずか数百人しかいなかった在留の人間族が、わずか50年で数十万人に膨れ上がるわけがない。

自分達の国土を、化学物質や禁呪で汚染しながら、これはかつての戦いの爪あとですと、いけしゃあしゃあと賠償を請求できるはずもない。

彼らは、ただ自分達の欲望を満たすために、善意を踏みにじり、金を吸い続けたに過ぎない。

その証拠に。

「全ての武器を捨て、国家の主権を差し出せば、すべての責を水に流すと彼らは言った。

我らは受け入れた。

その結果はどうだ？

侵攻してきた彼らの軍によって、国は焼かれ、男は殺され、女は犯された。

子供達は臓器の原料として工場に送られ、妊婦と胎児は化粧品の材料だ。

それが生きるものの為すことかあっ」

義姉は、ヴァール・ドナクは、右手に槍を、左手で宙を掴み、まなじりを裂けんばかりに見開いて、魂消るように悲痛な叫びをあげた。

「気づいていたか？ ルドウィン。」

我は、お前が、アザードが、フローラが、憎かった。

幸せそうなお前達を、かならずくぶり殺してやると心に誓った。

我らの故国を滅ぼした神族も、人間族も、一人残らず討ち滅ぼすと。

なのに、お前達は、我に優しくなったんだ。

どうしてだ。お前達さえいなければ、すべてを憎むことができたのにつ

ああ、それは嘘だよと、ルドウィンは思う。

姉は、すべてを憎み、呪うには、あまりにまっすぐ過ぎた。

憎いはずの子供の面倒を見て、慰めて、しっかりしろと励ますくらいにお人よしで。

だから、きつと、こんなことになっちゃったんだ、と。

「我らの国を滅ぼしても、世界は何も変わらなかった。

アース神族も、ヴァン神族も、白妖精も、人間もつ。

弱い国々を侵略し、抗うものを巨人族と呼び、邪悪と称する。

神々の為に、白妖精の為に、人間の為に世界があるわけではない。

我らは、虐げられたすべての者達の命と願いに贖うために、正しい世界を作り出す。

それが」

巨人族と呼ばれ、黒妖精と呼ばれ、あるいは、踏みつけられた小人や人間の。

「私の望み。我がここに立つ理由だ」

ルドウインは瞳を閉じた。

姉の後ろには、滅び去った巨人族の国が、踏みにじられた黒妖精の、人間の小人の、多くの人たちがいる。

道半ばで散っていった者の、血を吐きながら未来を託した者の願いがある。

だが、たとえ、そうだとしても。

「姉さん。俺は、貴女を止める」

奥歯を噛み締め、胸いっぱい息を吸い込み、腕と背にいっぱい力をこめて、ルドウインは白い長剣を構えて、炎の翼をはためかせる。

「俺は、姉さんの家族だから。」

姉さんのことが好きだから、愛しているから。だからっ」

狙いはひとつ。

姉が立つ甲板。姉に無限の力を与えている、要塞戦艦ナグルファル。

レヴァティンは、最強の神器。

触れるものすべてに“破滅”をもたらす。

「お前に我は止められぬ！」

姉の指が、文字を綴る。

文字からはつらが生まれ、ルドウインの手足を狙って、矢のごとく撃ち出された。

「炎よっ」

ルドウインもまた、翼から炎の小球を生み出して弾幕を張り、迎撃する。

しかし……

火球がつららに衝突する寸前、氷は自ら破碎して文字を描き、文字は雷光となって炎を貫き、ルドウインに襲い掛かった。

「つぐあ」

激痛をこらえるも、電撃はルドウインの軍服を切り裂いて文字を描き、文字は闇色の拘束具と変わって身体を自由を奪った。

背の羽とコントロールを失い、ルドウインは落下する。

次の瞬間、先ほどまで甲板にいたはずの少女が、背後から強烈な蹴りを見舞ってくれた。

法衣越しに見える、ほんのわずかにまるみを帯びた身体に成長の感慨を覚える間もなく、ルドウインは天空へ向けて打ち上げられ、否

ルドウインの上昇する先には、すでに義姉が待ち受けている。

「まだわからないのか。ルドウイン！」

魔法と拳と足が、まるで砂袋でも叩くように、さんざんにルドウインを打ち据えた。

次元が違う。ヴァールの強さも、魔法も、魔力も、何もかもが、ルドウインのはるか高みに立っている。

「二度だ。これまでに、二度、傷ついたお前を、我は見逃した。だが、お前はまたも我を阻もうとする。

“神剣の勇者”という名声が、そんなに大事か？

魂の底まで、アース神族の狗に成り下がったか！」

ナグルファルを触媒に、ガングニールが虚数空間からくみ出す魔力は無限。

その力を惜しげもなく使って、ヴァールは遠、近、左、右、上、下、全方位から問答無用で殴り蹴たぐり叩きのめしてくれた。

「おおかた、船を狙ったのだろうか、無駄だ。

確かにレヴァティンは強力な神器だろう。

魔法も物理も超越し、あらゆる存在を消滅させる。

その力は一見最強に見えるが、同時に最弱に他ならない。

接近して殴らなければならぬ武器など、射程がものをいう近代戦で何の役に立つものか！」

気にしていることをと、ルドウインは苦笑する。

確かに、純粹に殺す事だけを目的に考えたならば、この“がらくた”は弓銃にも劣る。

うつろに遠のく意識の中で、両手で持つ長剣に語りかけた。

「（馬鹿にされてるぞ、相棒）」

「（ケケケ。まあ事実だしなあ。

どうよ、盟約者。諦めちゃどうだい？

あのガングニールのマスターは……

おそらく魔法使いとして赤毛の三倍は優秀で、

状況判断と攻撃の組み立てが口うるさい嬢ちゃんの三倍は精密で、

白兵戦能力であんたの三倍は強い。

言っちゃあ悪いが、アンタに勝ち目はゼロだ）」

レヴァティンの分析は、冷酷なまでに的を射たものだ。だけど。

「（そうでもないさ。昔から……。  
アザードは、姉さんの三倍泣き虫で、  
フローラは、姉さんの三倍怒りっぽくって、  
ついでに俺は、姉さんの三倍は臆病だ）」  
「（ケケケ。全然自慢になってないぞ、盟約者）」  
「（でも、そんな俺たちは昔から……、姉さんの三倍は諦めが悪いんだ）」

何でも出来た姉。

そんな姉を追いかけるだけだった三人。  
一人だけなら、とつくに諦めていたかもしれない。

「（約束、したからな。すべての神器を砕くって。

アザに、フローラに、そして、レヴァティン、お前に）」

第一位契約神器レヴァティン。

契約神器が並みの魔術道具と違うのは、そのものに意志が宿っているからに他ならない。

彼や彼女らは、『使われる』のではなく、『自ら使い手を選ぶ』。

「（ケケケ。『すべての鍵と世界樹の破壊』……、そんな契約を呑んだ馬鹿はあんなだけだ）」

「（馬鹿で結構。たとえ馬鹿でも、馬鹿だからこそ、譲れないものがある）」

姉は作り出すだろう。

七つの鍵と世界樹の力を用い、

彼女が信じる正義のままに、正しい世界を。

「姉さん。姉さんは言ったね？」

虐げられたすべての者達の命と願いに贖うために、正しい世界を作り出すって。

姉さんは、世界樹でどんな願いを叶えるつもり？」

「決まっている。」

アース神族、ヴァン神族、白妖精、黒妖精、小人、巨人、人間。

七つの種族の境を無くし、歴史をもう一度やり直す。

戦も無く、飢えも無く、虐げられるものもない、真に平和で平等な世界を創ってみせる」

ああ、姉の信じる世界。それは、なんて純粹で、崇高で、……最悪なのか。

「そうか。だったら、俺は、俺の信じる世界の為に」

帰りたいカエリタイと泣きながら、それでも友軍を庇って、死んでいった戦友がいた。

飢えに苦しみ、戦火に焼かれた畑を、必死で耕し、苗を植える者達がいた。

神族でありながら、妖精でありながら、対立するものと手を取り合い、生き抜こうとする者たちがいた。

姉が世界を憎んだように、ルドウィンもまた、この不条理で不可解で不確実な世界を愛している。

苦しみと悲しみに押しつぶされてなお、未来を向いて手を伸ばす、生きとし生けるものの強さを信じている。

「俺は姉さんと闘う。」

すべての鍵と世界樹の消滅が、ガートランド王国の選択、いいや、俺の意思だ。

神々も妖精も小人も巨人も、あるがままに生きるべきだ。  
姉さんの抱いた偽善もろとも、過去より続く因縁をここで断ち切る！」

レヴァティンが煌煌と白く輝き、拘束具を焼き払った。  
灰となって散る軍服を見送りながら、炎の翼を背にした半裸のルドウインは笑う。

そうだ。これは、もはや戦争などではない。  
世界の命運をかけた、存続を望むものと改変を目指すものの決闘だ。

「何が、偽善かつ。  
護る国を持つものが、国を失ったものに言う台詞かあ」

ヴァールの槍が文字を描く。  
それが魔法と変わる前に、炎の翼をはためかせたルドウインが一拳に間合いを詰めて、文字を切り裂いた。

「っ」

ヴァールは、咄嗟に転移術式を発動させた。  
弟の剣が、一刹那遅れて、ガングニールのあつた空間を薙いでいた。

レヴァティンの力は、あらゆる存在と可能性の否定、“破滅”そのものの。  
虚数空間から呼び出す複製ならともかく、まともに受ければ、ガングニールとて破壊されかねない。

「そうか、それがお前の選択か。  
ならばよい。扉はひとつ。残る鍵は二つ。



共に行く気がないのなら、滅び去れ。

”世界樹”へ至るは、我一人で良い！」

「世界樹へは行かせない。

この世界を護る事が、俺が命を賭けた、俺のために命を賭けた連中の最後の望みだから。

“正しい世界”なんかに、俺たちの戦いを、生命を、歴史を、“現在の世界”を、否定なんてさせやしないっ」

ヴァールが光の剣で切りかかり、ルドウインは炎をまとった拳で殴りつける。

「それは勝者の、今持つものの驕りだ。

我は取り戻す。失ったものを、奪われたものを。

妻を嬲り犯され、娘を生きながら解体された父親の絶望が。

夫の目の前で腹を割かれ、胎児を踏み潰された母親の慟哭が。

愛する両親をひき潰され、追われた子の怒りが、お前にはわからないのか、ルドウイン・アーガナスト！」

「わかるさ。わかるから、俺は今戦っているんだ。ヴァール・ドナク・アーガナスト！」

光刃と炎拳が幾度も交差し激突し、遂には交じり合った魔力の塊が暴発する。

その余波を受けながら、姉は弟の黒い瞳を、弟は姉の金に輝く瞳を見た。

「我は」

「俺は」

「「お前（貴女）の正義を認めない」」

## 第二話 闘争（後書き）

拙作をお読みいただき、ありがとうございました。

### 第三話 強襲

5

アザードたちが、中等学校に進学する前に、大好きだった「お姉ちゃん」は行方不明になった。

大人たちがどれほど手を尽くしても、彼女を探し出す事はできず、事件は迷宮入りとなった。

いつか、「お姉ちゃん」のような魔法使いになろう。魔法の力で姉を探しに行こう。

それが、幼い三人の交わした約束だった。

ルドウィンとヴァールが激戦を繰り広げていた頃、アザードたちもまた、スキーズブラズニルでナグルファルの火線を掻い潜っていた。

武装のほとんどを失った白い船に、巨大なじゃがいも型の黒い船体から、真紅の閃光と蒼白の誘導弾が電の如く撃ちだされる。

「目標までの距離、およそ100,000レクス。

アザード！ 正面から魔力反応10、左右上下から誘導弾8」

「火砲は全部かわす。フローラは誘導弾の対処を」

「まかせて」

もしも地上から空を見あげるものがいたならば、目を疑っただろう。

人型戦闘機でも、龍型攻撃機でもない、巨大な巡洋艦が、降り注ぐ砲撃をまるで蝶のようにかわしてゆくのだから。

アザードは、要塞戦艦から撃ちだされる魔力の塊から、軌道と距離、精度を逆算し、わずかな隙間を縫うようにして船を突撃させる。だが、火砲はかわせても、飛来する誘導弾からは逃れきれない。

「わが奏でるは戦の詩。神技 “舞闘曲” 展開！」

誘導弾がスキーズブラズニルに激突する寸前、フローラが短い旋律を口ずさんだ。

彼女が腰に差した短剣、第三位契約神器ドラグヴェンデルが唸りをあげて、まばゆい光を発する。

その瞬間、船体の周囲を、フローラが呼び出した文字が埋め尽くし、空間を捻りあげて、誘導弾の軌道を歪める。

8つの弾頭は、悉く相打ちし、爆風は白い船体をわずかに焦がして消える。

「次、魔力砲20、誘導弾52！ できる！？」

「飽和攻撃か、なんとかするっ」

「あたしもっ」

曲芸ですらありえないような滅茶苦茶な操船で、スキーズブラズニルは雪崩のような弾幕の壁に飛び込んだ。

アザードはまるで独楽のように船体を回転させて、赤い閃光を振り払い、フローラは周囲の空間を次々と歪めて誘導弾をぶつけ合わせ、同士討ちを図る。

無謀な操船は重力圧となつて艦橋を殴りつけ、花火のように咲く誘導弾の爆風は振動となつて船を揺さぶる。

アザードとフローラの視界は暗転し、魔術の集中は千々に乱れ…、それでも木の葉のような白い船は、破壊と爆発のエネルギーに翻弄されながらも、第二波攻撃を乗り越えて見せた。

「艦首第2ブロックおよび、左舷第8ブロックに被弾1。隔壁閉鎖。消化剤自動散布開始」

「居住区が空なのは、気が楽ね」

眼鏡のずり落ちたアザードと、白金の髪を乱したフローラは、魂の抜けたような顔で微笑みあう。

いくら魔法の加護があつたとしても、そもそも巡洋艦で回避運動を取るなんて前提自体が無茶なのだ。

とはいえ、砲撃戦を行うとしても、現在のスキーズブラズニルの主砲は損壊し、機関砲と短距離誘導弾からなる近接火器防御システムも、残弾は0だ。

修復や補給をしたくても、出来ないのだ。

大戦の開始から三年が過ぎて、すでに世界人口は戦前の5%……20分の1以下に減少している。

全世界規模での長きに渡る総力戦の結果、技術者や専門知識を持った労働者も次々と鬼籍に入り、あらゆる工場や発電所、魔力炉が停止して、復旧のめどが立たなくなった。

たとえ、この戦いが終わつたとしても、人類も、神々も、妖精や小人族も、斜陽の時代を迎えるだろう。

「神焉戦争……」  
ラグナロク

アザードが呟いた言葉は、神話に存在する世界の終わりだ。

神槍ガングニルを持つ神々の王をはじめ、あらゆる生命が戦争によって死に絶え、9つの世界は、9つの箱の封印を解いた黒き巨人王の魔剣レヴァティンによって焼き滅ぼされる。

「皮肉よね。」

世界を護る槍と、世界を滅ぼす剣。

それが、まるで与えられた名前とは正反対の役割を演じている」

「うん。そうだね」

あるいは、と、アザードはかすかに思う。

お姉ちゃんは、ヴァール・ドナクは世界を護ろうとしているのか  
もしれない。

滅ぼされた巨人族の夢見た、理想の世界を。

「敵要塞艦までの距離、およそ80、000レクス。

魔力砲反応32。誘導弾128。大盤振る舞いね」

「フローラ」

アザードは艦長席から降りて、オペレーター席のフローラの肩を  
抱いた。

「何？ アザード？」

「愛してる」

フローラもまた、アザードの赤い髪を胸に抱き寄せるようにして、  
唇を重ね合わせた。

「あたしもよ。二十年前から、ずっと貴方を愛してる」

「勝とう」

「ええ」

二人が最期に交わした約束は  
生きて帰ろう、ではなかった。  
それが、二人の覚悟だった。

魔法という知識は、非常に危険なものだ。

文字に、ある種の超常的な力を宿らせる事で、物理法則を超えた現象を引き起こす。

それは、個々人によつて適性があつて、有る者は炎を扱うすべに長け、有る者は空間への干渉に長け、また有る者は、すべての魔法を自在に操ることができた。

これらの『力』は、科学で再現できないわけではなかったけれど、それでも、『魔法使い』が強大な存在であつたことは変わらない。

魔法使いが、己の欲望のままにその力を振るつたとき、悲劇は生まれ、時には国が傾くほどの大惨事を引き起こした。

ゆえに、神々や白妖精族は国家として魔法使いを徹底的に管理した。

特に、人間族には決して渡さぬよう、細心の注意を以つてこれを秘匿した。

人間とは、彼らにとって家畜であり、支配する対象でしかなかったからだ。

鉛筆一本作る技術を与えるな、水一滴、火の粉ひとかけら生み出す魔術を与えるな。

これが、神々と白妖精族の掟であり、方針であり、絶対の支配体制だった。

だが、巨人族と神々が呼ぶものたちの反乱で、すべては崩壊する。彼らは人間族の大地から神々を追ひ払い、水道や道路を整備し、堤防を築き、学校を建てた。

あらゆる種族に自立した文化を！

まるで夢のような目標を掲げ、土地土地の人間族に、各々の歴史と文化を学ぶ機会を作り、神々に対抗する技術と魔術を共有化した。巨人族が滅ぼされた後も、誇りと牙を取り戻した人間族は、右手

に剣を、左手に魔術をもつて神々や白妖精族に挑み、己が大地と主権をその手に取り戻した。

ただ一国だけ、五千年余りに及ぶ大国の属国として、何一つ独自の文化も誇りも生み出せなかった哀れな国が、「我々の文化は、すべて巨人族によって焼き払われたのだ！」と主張し、「我々の受けた支配は人類史上最も過酷なものだった」と巨人族を糾弾した。

その結果、ある程度事情を知るほかの国から「選挙権をはじめ、本国人と同等の権利を保障されたばかりか、赤字予算を埋める為に、本国の国家予算まで投入してもらえような支配があるかボケ！」と、徹底的に馬鹿にされ、口に泡を吹きながら証拠のない歴史の捏造に走ることになるのだが、それはまた別の話である。

さて、神々や白妖精から解放された人間族だったが、魔法の管理には同じように頭を悩ませる事になった。

危険で強大すぎる力なのである。

魔法使いたちは、容易に犯罪に走り、時には内乱を起こし、彼らを止めるためには一軍すら必要となった。

そのため、人間族もまた、魔法使いを国家として厳重に管理し、統制する事を余儀なくされた。

それは、アザードやルドウイン達の住む、ガートランド王国とて例外ではなかった。

魔法使いになりたい。

そんな願いを胸に成長した三人は、魔法を学ぶために魔術士官学校へと入学し、七つの鍵が引き起こした戦争の渦中へと身を投じる事になる。



ガートランド王国を、7つの熱核弾道弾が焼いた日のことを、アザードは今も夜、悪夢に見る。

早朝に宿舎から叩き起こされ、為すすべもなく、大都市が次々と巨大なきのこ雲に飲み込まれてゆく報道を、血がにじむほどに拳を握り締めて、ずっとずっと見つめていた。

平和の終わりは唐突に訪れた。

これまでは、理論上しか存在しなかった第一位契約神器　七つの鍵の創造と、それらが開く世界樹へ至る門の発見によって、世界が大混乱に陥ったとき、巨人族の末裔と黒妖精族の過激武装組織が、アース神族の大統領府と8つの軍事施設を急襲、七つの鍵の一つ、大神槍ガンゲニールを強奪した。

幸いにも生き延びた大統領は、これを最悪のテロ行為と糾弾し、国際社会の協力を訴えたが、巨人族の末裔と黒妖精族からなる実行組織は、「我々は一軍を以ってアース神族に戦いを挑んだまで。民間人を巻き込むことなく、軍のみを標的とする行為はテロに当たらない。我々、“虐げられしものたち”は、すべての国と軍に対し、ここに聖戦を開始する事を宣言する」と一蹴した。

詭弁である。

拠るべき国も仕えるべき政府もたない、非合法的武装組織が破壊活動を行い、大規模破壊兵器を強奪したのだ。たとえ偶然民間人を巻き込まなかったとしても、一片の正当性もたない邪悪なテロ行為であることに、なんら変わりはない。

だが、この詭弁に乗った者達がいた。アース神族と敵対関係にあるヴァン神族の大国と、同盟関係にあった人間族の大国が、彼らの暴挙を支持した。

本来であれば、テロ行為を容認する馬鹿国家として、国際社会の評価を地の底にまで落としただろう。

しかしながら、世界最強を謳われたアース神族の軍隊も、少なからぬ被害を受けており、何より、今かの国に“第一位契約神器ガングニール”は存在しない……。

平和とは、各国のパワーバランスが生み出す、一夜の風ぎに過ぎない。

最強の軍事力と最大の経済力で、アース神族が秩序を維持する時代は終わった。立ち上がれ、“世界樹”の加護の元、新世界へと誘われん！

二国の声明を皮切りに、まるで張り詰めていた糸が切れるように、世界規模での大動乱が幕を開けた。

アース神族に干渉の力なしと知るや、長年対立関係にあった白妖精族と黒妖精族は、互いの“鍵”を掲げて、血で血を洗う戦火へと突入。

ヴァン神族と、人間族最大の国家は、我こそがミッドガルド（人の大陸）を治める盟主なりと、ありあまる人口と武器にものを言わせて周辺諸国へと侵攻を開始した。

ミッドガルド大陸の東端で、同盟国であるアース神族に護られて、惰眠を貪っていたガートランド王国も、そのうねりにいやおうなく飲み込まれていった。

中西部に国境を位置する、ガートランド王国の潜在的敵国家が、七つの大陸間弾道弾をもってガートランド王国を爆撃し、戦争は始

まった。

長年の平和と専守防衛を是とする国の方針から、非常事態における法整備も、スパイ防止法の制定も行っていなかったガートランド王国は、工作員達の無差別放火や無差別ガス攻撃によって、多くの国民を虐殺され、また熱核攻撃によって防衛網をズタズタに寸断されていた。

翌日、南西部の隣国が、核攻撃を加えてきた隣国と電撃的に同盟を結び、護るもののないガートランド王国へ宣戦を布告、侵略を開始する。  
が。

出港した海軍艦隊は、たかだか4レクスの高波に攫われて海の底に沈み、購入したばかりの新型機をいきなり実践投入した空軍も、整備不良と錬度不足がたたったか、領空に侵入する前にすべて墜落……。軍が動けないならば我らが護ると、決死の覚悟で緊急出動したガートランド海上警察に救援を要請したばかりか、なぜかガートランド王国政府に謝罪と賠償を要求する斜め上の反応を見せた。

更にその翌日、中西部の隣国が一夜にして同盟を破棄し、南西部の隣国に怒涛の勢いで攻め入ったのは自明の理といえるだろう。首都近郊は、四百近い野砲の掃射を受けて、阿鼻叫喚の地獄絵図と化し、無傷だったはずの陸軍は、何十万人もの市民を置き去りに、蜘蛛の子を散らすように四散した。

学習力が無いのかお前らは、とガートランド王国国民は呆れ果てたが、そんな余裕はすぐに消えうせた。

『ミッドガルド人民連邦国』      人間族、最大の軍事大国が、王国へと攻め寄せたのだ。

### 第三話 強襲（後書き）

拙作をお読みいただき、ありがとうございました。

## 第四話 侵略

7

アザードとフローラが操る高速巡洋艦スキーズブラズニルが、要塞戦艦ナグルファルの飽和攻撃によって接近を阻まれていた頃、ルドウインもまたヴァールによって一方的に追い詰められていた。

「どうした？」 神剣の勇者」

なぜレヴァティンを使わない？ なぜ我を殺さない？

その程度の力で、その程度の覚悟で、我を阻むというか？

ふざけるなっ」

黒き魔女の細く白い指が文字を綴り、文字は青い雷となり、あるいは赤黒い刃となって半裸のルドウインを切り裂いた。

咄嗟に展開した炎の盾など何の役にも立ちはない。鮮血が空に散り、悲鳴をあげる余裕すらなく、義弟は義姉によって一方的な罠に殺しにあっていた。

「（冗談じゃ、ないぞ）」

魔術師としての次元が違うのは、ルドウインとて百も承知だ。だからと言って。

「（俺が姉さんを、ヴァール・ドナク・アーガナストを斬れるわけないだろうが）」

背の炎の翼をはためかせる。

拳を握りこむ。

ナグルファルから無限の魔力の供給を受け、あらゆる魔術を無制限に展開する黒き魔女<sup>テラ</sup>を相手に、射撃戦で勝てるわけが無い。

致命傷こそ免れているものの、こちらの防御魔術は紙のように引き裂かれ、このまま削り殺しどころか、ミンチにされるのが見えている。

接近してぶん殴る。それだけが、ルドウインの勝機！

「おおおっっ」

雄たけびをあげ、弾幕をあびる覚悟で突進する。

ヴァールは紅い唇を三日月に歪ませ、金の瞳で睨みつけ、黒く長い髪をなびかせて待ち構える。

その余裕が命取りだ。どのようなカウンターを狙っても、今更スピードのついた突進を止められるものか。

「獲ったっ」

ルドウインの拳がヴァールの鳩尾をとらえる。

「我がなっ」

ストリートを受ける寸前に、ヴァールは下半身を支点に、全身を水平に傾け、過剰なまでの上体そらしでルドウインの拳をかわして見せた。

「空中戦というものを理解していないのか？

それでよく今まで生き残れた」

隙だらけのルドウインの腹を、ヴァールの織手が容赦なく打ち上げる。

更に、くの字に身体を折って浮いた顎を、蹴り上げた。

これが効いた。

ルドウインの視界はブラックアウトして、白目をむいて棒立ちになる。

それから、いったい何発もらったものやら、わかりはしない。

全身に吐き出すような痛みを受けて、ようやく弟が取り戻した狭い視界には、姉の顔があった。

息が届くほどに近い距離、ヴァールの瞳の中には、血で汚れたルドウインの顔が映っている。

「なあ、ルド。痛かったか？」

「ねえ、さん？」

姉はルドウインの黒い髪を優しく梳いて、啄ばむようにそっと瞳にキスをした。

血か、涙か、弟の視界を塞いでいる、赤い汚れを舌先でなめ取る。  
「なにを、する」

「この翼。もぎ取ってやったら、もっと痛いだろうなあ」  
修羅の顔で、ヴァールは義弟に微笑んだ。

文字が明滅する。

禍々しい光を帯びた双掌で、力任せにルドウインの背から生えた翼を引きちぎった。

悲鳴、絶叫。

その声が心地良い。

魔術の産物とはいえ、身体の一部をもぎ取られたルドウインの背は赤く染まり、身体はおこりにでもかかったように痙攣している。

「堕ちろ！」

愛しく憎い敵の喉首を掴んだまま、はるか地上へとヴァールは下降する。

殺さぬように、けれど、二度と立ち上がれぬように。

大地へと叩き付けた。

轟音をあげて、土煙が舞う。勝負は、ついた。

「俺の信じる世界の為に、か。  
青いな。そして薄っぺらい。」

お前は、お前の正義は、我に届かない」

ヴァールは黒い槍、ガングニールを肩に担ぎ、世界樹へと歩き始めた。

「……て」

聞こえない。

聞こえるはずがない。

止める声など、立ち上がる音など、聞こえるはずがない。

「……てよ、姉さん。行かせないって、言っただろ？」

「死にたいのか」

苛立たい。

胸のうちからふつつつと湧いてくる激情を、ヴァールは必死で押さえた。

「なぜ闘う？」

なぜ止める？

力も覚悟も足りなくせに。

もう、やめろ。

我に、お前を、殺させるなっ」

パン。

そう、乾いた音がした。

怒りのままに叫び、振り向いたヴァールの頬を、ルドウインがはつていた。

「え？」

「傲慢だよ。姉さん」

「な、に？」

頬が、朱を帯びる。

ヴァールは呆然と、ルドウインを見返した。

有り得ない。

あれほどの重傷を負わせて動けるわけがない。

自分がこのような隙を見せるはずもない。

なのに、なぜ、弟は自分の前に立つ？



なぜ、自分は。

「わかってる。俺はどう頑張っても、姉さんには届かない。でも、俺を支えてくれたひとがいた。

俺の命を助けてくれたヤツがいた。

未来を夢見て散っていった戦友達がいた。

たとえ俺の身体が動かなくても、俺の心がくたばっても、そういつらが俺の背中を押すんだ。

この世界を護れ、って」

世界樹に臨む、石と乾いた土だけが存在する荒野。

ぼろぞうきんよりもみすばらしい姿になったルドウインが静かに言葉を紡ぐ。

ヴァールは、ふと、幻視した。

幼いアザードが、フローラが、名前も知らない人々が、ルドウインの背後に手を伸ばし、支えているのを。

「無意味だよ。この世界も、人間も、神々も、腐り果てている。

どれだけのひとが死んだ、どれだけの悲劇が起こった？

戦争、貧困、絶望、もうたくさんだ。

世界はやり直すべきなんだ。お前だって、そう思うだろう？」「思わない」

ルドウインが、白い長剣を構えた。

世界を滅ぼす剣、その名前を与えられた神器を。

「平和は与えられるものじゃない。

富も、希望も誰かにもたらされるものじゃない。

血を流して、汗を流して、涙を流して、勝ち取り、守り抜くものだ。

姉さんがやろうとしていることは、絶対者としての行為だ。

武器を捨てれば平和になる？

隣国が攻めてきて戦争が起こるだけだ。

貧乏な国に施しをすれば国が豊かになる？

過度な援助をすれば、為政者は甘えて真面目に政治に取り組まなくなるだろうよ。

最悪の場合、援助金と物資の全てを軍事費に換えて、より圧制を敷くかもしれない。

希望は、自分で見出して、手を伸ばして、歩かなきゃ見つけれない。

それを無視して、アンタはどんな世界を創るつもりだ？

この世界が腐ってるって？

姉さんが、悪いところしか見ていなかっただけじゃないのか？」

ヴァールもまた、黒い槍を構えた。

世界の運命を司る神王の槍、その名前を与えられた神器を。

「国を滅ぼされて、何を見るというんだ？

見てきたものは悪意だけだ。

お前は平和な世界で愛情に包まれて……。

我の手は血塗れだ。

星落しの禁呪でいくつもの神々の基地を焼いたよ。

恨みと怨みでとくに魂は地獄に落ちている。

お前に、お前なんか何がわかる。

“神剣の勇者”と称えられて、輝かしい道を歩いてきたお前に、

我の、私の気持ちがわかるものか。

この憎悪が、この怨嗟が、この呪詛が、お前なんかにわかってたまるか！」

「わかる。でも、憎しみより確かなものが……俺には、ある！」

「そんなものはない。あるとすれば、夢見る『理想郷』への渴望だけだ」

「姉さんっ」

ヴァールは地を蹴り、まるでオモイをぶつけるかのように、真っ

直ぐな正拳をルドウインの胸板に叩き込んだ。

何かの魔術がかかっていたのか、棒立ちだったルドウインは、まるでボールのようにふっとばされ、地面を転がった。

危険だと、全身の細胞が悲鳴をあげている。

このままでは死んでしまふ、と。

だのに、何故だろう。

動かない指先に無理やり力をこめて、張り付いた手足を操り人形のように動かして、ルドウインは立ち上がった。

ああ、そうか、とこの期に及んで理解する。

自分の命よりも大切なものがあっただけ。

護りたいものが、大事だと思えるものがあっただけ。

ルドウインは東を振り返り、一礼した。

あそこには王国があり、王都があり、彼にとってかけがえのない人たちが、生きている。

「レヴァティン、悪いな。死地に付き合わせる」

「（ケケケ。マスター、水臭いぞ）」

姉との出会いから十二年。

戦争の始まりから三年。

思い返せば、これまでの日々は、ひどく短くて、けれど。

「意味はあった。

生まれてきて、生きてきて良かった。

それが俺の姉さんを止める理由だっ」

三年前、ガートランド王国国境に襲来した万余のミッドガルド人  
民連邦軍は、わずか数百名に満たない王国軍国境警備隊を一日で粉  
砕、ブレイブダガー州に侵攻を開始するや否や、わずか一日のうち  
に三つの都市を陥落せしめた。

連邦兵の蛮行は非道を極め、老人も幼子も関係なく戦車で踏み潰  
され、男は四肢を裂かれてビルに吊られ、女は暴行を受けた上で下  
腹部から喉まで街灯で貫かれて飾られた。

肉体を徹底的に破壊する。それがかの国における虐殺と戦争の流  
儀であった。

王国にとって幸いだったのは、緊急時における独自裁量権を与え  
られていた海軍潜水艦隊が獅子奮迅の活躍で連邦海軍を追い払った  
こと。

そしてまた、当時、巨人族が制圧されていた自治州で解放運動を  
先導していたために、連邦陸軍の大部分を鎮圧のため派遣していた  
こと。

また、西部諸国との間に勃発した戦争の為に、東の王国側には航  
空駆逐艦をはじめとする航空戦力をほとんど投入できなかったこと  
だろう。

だが、王国の動きは連邦以上に遅かった。

突然の核攻撃から七日、連邦の侵攻から二日経ち、すでに百万  
人単位ではきかない死傷者を出しながら、なお軍による組織的反攻  
に踏み切れずにいたのだ。

国政に携わる貴族達の中には、『我々は専守防衛の精神に乗っ取  
り、全面降伏することでは以後は連邦の自治州として、ひとつのミッ  
ドガルドの成立に力を注ぐべき』などという、すでに専守防衛でも  
なんでもない事大主義じみた暴論を説く輩まで飛び出す始末だった。

このように王国政府が大混乱に陥っていた頃、王都パーリヴァスの、魔術士官学校、国立アーク学院の生徒エレキウス・ストレンジャーは、学園長にブレイブダガー州の州都、スカイナイブズの救援に生徒達の派遣を談判し、当たり前のように却下された。

銀髪と銀の眉を逆立てて論じる生徒会長に、白く豊かな髭を生やした学院長は重く淀んだ瞳を向けた。

「わが学院は魔術仕官を育てているが、軍人を育てているわけではない」

「ですが非常時です。スカイナイブズには空港がある。

もしもかの都市が押さえられたら、その時点で王国全土が爆撃の対象となる。我が国は滅びます」

「自らを守ろうともしない国なぞ、滅びれば善いのだ」

「なんということを……」

この時、エレキウスは知らなかった。

学院長は、否、学院長だけではない。

あらゆる教育、軍事、経済の代表者達が国にかけあい、防衛策を訴えたが、行政は受け付けなかったのだ。

ミッドガルド人民連邦による王国掌握の戦略は、すでに行政深くにまで浸透していた。

せめて、アース神族や白妖精族のように、選挙による立法府が存在すれば、ここまで酷い事態にはならなかったかもしれない。

国民が警鐘を鳴らし、政府もその意見を少なからず汲む事ができたかもしれない。

が、残念ながらこの世界の人間族の国には、選挙制度はなかった。もつとも、王国の場合、あっても同じだったかもしれない。

ミッドガルド人民連邦の運営する通信社から莫大な資金提供を受けた自称進歩派の新聞社をはじめ、映像、電波、各媒体は無条件降伏を一斉に説き、わずかなメディアが細々と抵抗していたのが現実

だ。

たとえば、全国レベルで情報を共有化し、海外を含む記事やマスコミを検証する手段があれば、結果は全く異なるものとなっていたかもしれないが、なかったのだからどうしようもない。

かくて、王国の命運は尽きようとしていた。

「すまない。俺には学院長を説得することができなかった」

生徒会室で頭を下げた銀髪の少年を、集まった数十名の有志代表は労った。

最初から、覚悟はしていた。

ここに集ったのは州都スカイナイブズに実家のある生徒や、ブレイドガー州に親類のいる生徒。

たとえ学校の方針に逆らっても、州都スカイナイブズ数十万の命と、ブレイドガー州数百万の命を見捨てられなかった者達だ。

恐怖はあった。

今にも貧血で倒れそうだったし、小便をちびりそうだった。

それでも、彼らは行くと決めた。

魔術師には、命を救う『力』があるのだから。

有志達は解散し出立の準備へと向かった時、アザードはエレキウスを呼び止めた。

「エレキウス。君は来ちゃ駄目だ」

「アザード。何を言ってるんだ？ 俺も皆と一緒に戦うぞ」

「ううん。駄目だよ。君には、やることがあるはずだ」

アザードの青い瞳に射抜かれて、エレキウスは目を逸らした。

「軍人じゃなくても、僕達がやろうとしていることは、明らかに文<sup>シビ</sup>民統治から離れたものだ。

国が交戦を決めなければ、組織的な反抗作戦は不可能だ。

レジスタンスなんてやってちゃ、被害がどれほど増えるか想像もつかない」

「しかし、それは、俺達にはどうしようもないことだ」

「僕たちには、ね。でも、君は違う。そうだろう。エレキウス・ガートランド?」

アザードの言葉に、エレキウスは俯いた。銀の前髪が、青灰色の瞳を隠す。

「俺は貴族などなりたくなかった。

お前達と一緒に、魔術師を目指したかった」

「目指すところは、きつと一緒にだよ」

「違う。違うんだ」

震えるエレキウスの掌を、アザードはぎゅっと握り締めた。

あるいは、これが今生の別れになるかもしれない。

「お願いだ。王家と、この国を護って」

二人はすれ違う。

残るものと、行くもの。

その狭間を埋めようとでもするかのように、エレキウスは叫んだ。

「アザードっ。」

俺は必ずお前との約束を護ろう。

だから、あと三日。三日だけ連邦の侵攻を防いでくれ。

そうすれば、必ず”レポート・セカンド”の副産物をスカイナイズに送る。

頼む、生き残ってくれ!」

聖暦6663年の州都スカイナイズの防衛戦は、のちの史書にこう綴られる事になる。

若きガートランド国王、エレキウス・ガートランドに見出された神剣の勇者が仲間達とともに赴き、侵略者達を撃退した、と。

やがて、史実は散逸し、歪曲され、遂には魔物の軍勢を、炎の神剣を手にした勇者が追い払った、とまで改変されるのだが、真実は

違った。

王家直系の曾孫であつたエレキウス・ガートランドは、生涯王位に就くことはなかった。

世界人口の95%を失つた大戦で、彼が將軍の座を押し付けられ、それなりに見事な采配を振るつたこと。

老いた彼が壊滅した王国を立て直すため、名宰相として敏腕を振るつたことは事実であり、彼の死後、数代のちの国王が功績を称え「王」としての贈り名を贈つた。

だが、エレキウスがなぜ王位に就くことを固辞し続けたのか、彼がなぜ王国を護ることに全力を尽くしたのか、その理由、若き日にかわした約束を知るものは、後世にはいない。

そして、スカイナイブズ防衛戦、その真の姿もまた。

この戦いで、魔術士官学校有志百余名を指揮したのは、後のスキーズブラズニル艦長（代理）アザード・ノアである。

彼は、兵数ではるかに勝り、装備でも圧倒する連邦軍に対し、前代未聞の布陣を引いた。

魔術師百余名を、各々の得意分野に合わせて分散配置させ、随時連携をとつたのだ。

予知や情報解析にすぐれた生徒達を集めて、数十秒後の敵攻撃を予測。

テレパスやマインドコネクトなどの、通信に優れた生徒達がそれを通達。

爆破や火球などの攻撃可能な魔術に秀でた生徒達が迎撃し。

空間干渉や盾、障壁の創造に優れた生徒達が、町の先に建造したバリケードの後ろで防壁を展開して守る。

いわば、魔術師をひとつのシステムとして扱うこの戦術は、これ



までの世界史において存在しない、稀有なものだった。

これまでの常識では、魔術師と言えば研究者であり、一人で行動するのが当たり前というのが世界の常識だったのだ。

歴史上には、こういった空白が稀に存在する。

これは別の世界の話であるが、黒色火薬を使った旧式銃を持つ兵士を三隊並べて、清掃、玉込め、掃射という三段撃ちの戦術は、実は銃が作られた地方とは全く無関係のはるか遠い島国で初めて使われた。

遊牧民族が編み出した騎馬を用いて陣地を築かぬ遊撃戦術、黒太子と呼ばれる名将が用いた大型弓兵を使った遠隔射撃戦術、軍神と称えられた男がはじめて使った迂回、叵を利用する奇襲戦術、東洋のちっぽけな島国の提督が列強国の中でも世界最強と呼ばれた艦隊をふつとばした砲撃戦術などは、それまでの歴史に存在しない、コロンブスの卵として使われ、絶大な戦果をあげることになる。

この世界の場合、アザードの魔術連携はそれらに匹敵する革命的な戦術だった。

突出した神器として、第五位にはあたるだろう、巨人型の陸上戦車を魔術の集中砲火で片端から吹き飛ばし、敵の砲撃は予測した上ですべて完全防御。

緒戦は、わずか百名の生徒達がその力を十全に発揮して、かなりの優勢を保っていた。

「アザードのヤツ、よくこんなやり方を考えるぜ」

「なんだっけ、あいつ昔言ってたな。凡才が三人集まったら、天才に追いつけるのか知りたいって」

「あいつこそ、天才だろ。あと、フローラ・ワーキュリー。」

「原案は彼女だって話だ。やっぱ我が校が誇る神童と才媛は違うね」  
「一人だけ、バカがいるけどな」

「言ってやるなよ」

ほとんど名指しで馬鹿扱いされていたのが、ルドウィン・アーガナストである。

彼は残念ながら、魔術師としての才覚は二人には遠く及ばなかった。

更に成績でも及ばなかった。容姿でも及ばなかった。

だから、何かと話題にのぼりやすい看板カップルのおまけとして、煙たがれることも多かった。

「気にするなよ、ルド」

「気にしちゃいない。テリー」

赤毛の級友がカップ入りの水を差し入れてくれた。

そばかすの浮いた彼の顔、その額をルドウィンは指でパンと弾く。  
「いってえなあ」

「隙だらけだよ」

戦争の合間、わずかな風、に、カップをぶつけあい、水を喉に流し込む。

「俺は感謝してるぜ。ルドウィン。」

お前は、無関係なのに、俺の故郷を守るために来てくれた。

それが、感謝しきれなくらい、嬉しい」

「ダチだろ。当たり前じゃないか」

ルドウィンは、笑う。

笑いながら、カップを持った右手とは逆、銃を持った左腕が、酷く震えていた。

自分は誰かを撃ち殺しただろうか？

さきほど放った火球、人型戦車を焼いた火球。

あの中には、生きている人がいたはずだ。

「（おかしいよ。おかしいよ。」

俺はどうしてここで戦ってるんだ。

殺すため、そんなことのために、俺は魔法使いになろうとしたのか？

違うだろ？　こんなの、おかしい」

ふいに、頭の中がクリアになる感覚。

通信魔術によるデータリンクだ。

敵の、連邦軍の予測攻撃が、ルドウィン達の脳裏に転送される。

「嘘、だろ。正気かよ、連中は！」

悪夢が、始まった。

戦車による突破に失敗した連邦軍が用いた戦術はシンプルなものだった。

軍服すらろくにまとわぬ一般兵による一斉突撃。

バリケードの隙間から、生徒達は銃を撃つ。

撃つ。

撃つ。

撃つ。

連邦兵は異常と言えた。

生きている味方の体を盾にする。

死んでも突撃、殺されても突撃。

まるで出来の悪いホラーだ。

奇跡的な連携を見せていた生徒達が、恐慌に陥り、無我夢中で銃を撃ち、魔術を放ちだす。

「なんなんだよ、あいつら、わけわかんねえよ」

「人の命をゴミ以下にしか見てやがらねえ」

「いやだ、俺はもう撃てない」

銃を降ろすもの、逃げ出すもの。

弾幕が薄くなった場所に、まるで地獄に伸びた蜘蛛の糸でも掴もうとするかのように、連邦兵の銃撃が殺到する。

防御担当の生徒達の魔力だって無限ではない。

まるで堤防に穴があくように、次々と、次と、障壁が消えてゆく。

「あ、あ、あ」

ルドウインは空になった銃を見た。  
弾薬を補充しなければならぬ。  
倒れている。

顔見知り、友人が、血塗れになって倒れてる。

「うそ、だ。こんなの嘘だ」

その時、ルドウインは見た。  
敵兵の海の向こう岸に立つ、オールバックの黒髪の、傷のついた  
隻眼の男を。

「なんだ、てめえら、だらしないな。

あの程度のバリケードも破れないのかよ。

もう、いいや。死んじまえ。

たとえ10億人が死んでも、1億人が残ればオレ達の勝ちなんだ  
からよ。

不用品はちゃあんと処分しないとなあっ」

連邦軍の軍服を着た男は、見るからに頑丈で豪華な造りの剣を掲  
げた。

風が、集う。

禍々しい気配が、何かが、男の周囲に引き込まれてゆく。

「冥土の土産に覚えておけ。

我が名はゲオルク・シュヴァイツァー！。

いずれこの国を制する男の名だ！」

逃げろ、と。誰かが言った。

逃げろと、ルドウインは言った。

あれは、あの剣はろくでもないと。

ただでは、すまない、と。

「吠える。ノートウング！」

勝利を約束された剣よ、我らに逆らう愚者どもを塵に変えろ。

紅覇      ” 長征 ”      発動！

バリケードを捨てて、隣にいたテリーの手を掴み、逃げ出した。  
だから、ルドウインは知らない。

ただ、通信術者が見せた、その景色は、竜巻みたいな何かと。

一面の    あ    かった。

「テリー？」

大丈夫だと、ルドウインは思った。

手はちゃんと繋いでいる。

スカイナイズ市にある小さな料理屋の息子。

魔術師になって家族を楽にさせてやるって。

「なあ、テリー。こたえろよ」

だから、こんなのは嘘。

腕だけ、なんて、そんなのはわるいゆめ。

「あ、あ、あ、ああああああああっっっ」

慟哭は、受け取るものもないまま、真紅の海へ消えていった。

## 第五話 反攻

ブレイブダガー州州都スカイナイブズを巡る攻防戦、その一日めは、連邦軍指令ゲオルク・シュバイツァーの一撃によって、硬直から一転、連邦軍の大勝に終わった。

州都を守る守備隊は、破壊された幾重にも及ぶバリケードを破棄、防衛陣地を捨てて後退して行った。

連邦軍もまた、兵士達の混乱が大きく、守備隊の陣地を接收、破壊するにとどめ、追撃はしなかった。

ミッドガルド人民連邦国遠征軍指令副官、アルト・シュターレンは、吐き気をこらえながら戦場を、否、虐殺場の跡地を走り回っていた。

心臓が刻む鼓動は重く大きく、汗と脂汗がひっきりなしに流れ落ちる。

屍山血河、そんな言葉さえ、生ぬるい鉄さびと糞尿の混じった空気の中で、部下とともに戦死者の認識票を探す。

「うぶ」

胃からこみあげる何か。

小柄な背を震わせて、短く刈った栗色の髪を掻き耨り、青年仕官はげーげーと吐しゃ物を吐いた。

「何もかもがめちゃくちゃな戦争だ」

昨日まで。国境を破り、三つの都市を落とすまでは、アルトにとって馴染んだ戦場だった。

武器を持たず、ろくな抵抗も出来ない人民を一方的に戮殺し、物品を強奪し、犯し、火をかける。

連邦では年に八万回を超える小規模な反乱が起きる。

軽く計算しても一日に二百の暴動を鎮圧しているのだ。

一方的な殺戮も強奪も焼却も手慣れたものだった。

だが、今回の相手は違う。

「……軍も動いていないのに、契約神器を、人型戦車を破壊するとは」

アルトは手でまぶたをおさえた。

今でも、機械の巨人が、炎に包まれて倒壊する姿が脳裏に浮かぶ連邦軍が戦った部隊、民間人とも非正規軍とも知れぬ正体不明の部隊は抗っていた。

目の前に迫る破滅に対し、諦観ではなく、必死で抗っていた。

「（誰もが格好をつける。

私は未来を憂いている、と。

私は祖国を愛しているから、この国を心配している、と。

しかし、決して『自分からは決して動き出そうとはしない』

それが、王国のマスメディアを検証し、導き出した連邦軍の王国人像でした）」

汗に濡れた栗色の髪を後ろになでつけ、逆流してきた胃酸を、血で濡れた地面に吐き捨てた。

「（楽観論だったかもしれません。

アース神族という防柵を失えば、容易く手の中に落ちる果実。

この国のマスメディアが報道する『王国像』が、ただの虚像だったとすれば、面倒な事になります）」

兵数不明。

武装不明。

しかし、そんなあやふやな部隊に、現に連邦軍は足を止められていないではないか。

そして、ゲオルクの神器によって、バリケードの破壊と引き換えに、数百名に及ぶ戦死者を出してしまった。

「（不吉な予感がします）」

結果から見れば、アルトの分析はおおまかには正しく、真相の一面を射抜いていた。

連邦は、完全な政権の独裁下にあり、言論の自由など存在しなかった。

マスメディアを自由に操り、政府仕掛けの暴力デモを意図的に起こしたり、意図的に潰す事も簡単だった。

それゆえに、『マスメディア』Ⅱ『王国世論』と読み違えても無理はなかった。

これは、一時期、王国でミッドガルド連邦脅威論が高まったとき、王国政府に「連邦を批判するマスメディアを黙らせる」と批判したことが証左となるだろう。

大量の資金と政治圧力で王国マスメディアを厳重に縛りつけ、これで王国世論を掌握したと、思い込んだ。

それは正しい。

間違っではない。

だが、王国人は政府を全面的に信用しなかったのと同様に、マスメディアもまた全面的に信用してはいなかった。

そして、連邦に縛られて連邦好みの記事ばかりを編集した一部のメディアが、本当の意味で王国の真実を載せるはずもない。

愚かな事に、連邦政府首脳陣は自ら作った工作機関の希望記事という虚報に踊らされるという愚を犯していたのである。

この聡明な副官が、その事実がつかうのは、もう少し先のことになる。

アルト・シュターレンは、王国の守備陣地を徹底的に破壊したあと、死屍累々の血泥からいくばくかの遺品を持ち帰り、天幕で司令官の指示を仰いだ。

「ふん。報告書を本国に送っておけ。

どうせいくらでも補充の利く連中だ」

ゲオルク・シュバイツァーは、血のように赤い酒を瓶ごと煽りながら、足を”飼い犬”の上に乗せた。

首輪に繋がった鎖を無理やり引かれて、くぐもった悲鳴が上がる。



軍靴の泥が汚す、白い女の肌から、アルトは目を背けた。

先に落した都市で徴発した王国人の女達が、狗のように首輪と紐をつけられ、四つんばいで這わされている。

「（こんな男が英雄とは）」

「アルト。貴様、オレが、ゴミどもを処分したことが不満か？」

舐めるような目でねめつけられ、アルトは冷や汗をかく。

「いえ、司令には司令のお考えあつてのことと、判断しています」

ニヤリと、ゲオルクは隻眼を歪めた。

「そうだ。オレにはオレの考えがある。

オレは優しい指揮官だからな。戦死者は少ない方がいい。

あんな急造の柵ひとつ崩せずに、兵を犬死させるわけにはいかん」

「だから、処分された……？」

「そうだ。明日からは、死に物狂いで戦うことだろう。

戦わねば、俺によつて殺される。

戦えば、敵を殺し、金と、女と、”命”を得る事ができる。

どちらが賢明か、我が有能なる兵士どもも肝に銘じることだろうよ」

覚えておけ、と、ゲオルクは続けた。

「人を従わせるのは、言葉ではない。恐怖だ」

左手に”犬”をひく鎖を、右手に金色に輝く蛮刀、魔剣ノートウングを手にしたゲオルクは、軍服の上からでもわかる筋肉質な巨軀を震わせて、からからと笑った。

「南にやった連中は順調か」

「はい。第6、第7大隊から、スプリングシティを陥落せしめたという連絡が入りました」

「スプリングシティ？ ああ、あの”無防備都市宣言”を行った馬鹿な町か」

無防備都市宣言とは、捕虜に対する人道的扱いを保障する国際条約に追加された議定書のひとつで、すべての武器と軍隊を含む武装組織を排除した上で、この宣言を行うことにより、紛争当事国によ

る無防備地区への攻撃を手段のいかんを問わず禁止するというものである。

だが、そもそもこの宣言は「紛争相手国の占領を無抵抗で受け入れる」事を宣言するもので、地域単位での降伏宣言である。

戦争に巻き込まれないために無防備宣言を、と熱狂的な運動家は主張したが、現実には、率先して「占領しちゃってください。物理的攻撃さえされなければ、貴国の統治を受け入れ、なにされようが構いませんよアハン」という、外患誘致そのものの、とてつもなく馬鹿な宣言なのだ。

その上、致命的なことに、国際条約である以上、批准していない国、たとえばミッドガルド連邦国には、何の拘束力も持たなかった。かくして、無防備宣言をろくに調べもせず妄信し、避難すらしなかったスプリングシティの一部住民はこの世の地獄を見ることがなった。

「負けてはられんぞ。州都スカイナイブズ。あと二日で落とす」

ゲオルクの確信通りだった。

ノートウングの広範囲破壊魔術によって、一網打尽に殲滅されるを恐れた生徒達は、街道各所に分散して防衛に当たらざるを得ず、瞬く間に各個撃破された。

夜明けの開戦からわずか3時間で、最終防衛線は突破され、数万の連邦兵がスカイナイブズに雪崩れこみ、暴拳の限りを尽くしたのだ。

さかのぼる事半日前に、かねてから連邦国と通じていた州知事は、事前の打ち合わせどおり降伏交渉のために連邦軍陣地を家族とともに訪れ、ゲオルクによって惨殺された。

圧倒的軍勢力を誇るミッドガルド連邦にとって、州知事存在は、せいぜい使い捨ての道具に過ぎなかったのである。

八人いた彼の家族で、生を永らえたのは、娘一人であり、彼女もまた生涯に渡る心的苦痛を得ることとなった。

弾痕や割れた硝子、略奪された商店、……市街戦の後もなまなましい、スカイナイズ。

ブレイブダガー州にたった一つしかない空港の、駐車場に張ったキャンプで、生徒達は折り重なるようにして倒れていた。

「生きてるか？」

「まだ、死ねねーよ」

二日間の戦いで、105名いた生徒達のうち36人が戦死した。損耗率30%オーバー。作戦遂行能力なし。立派な全滅である。そもそも、今日の午後からは、生徒達はほとんど戦力になっていなかった。

魔法使いは、強力な戦闘能力を有するが、魔法の行使には莫大な体力と精神力を消費する。

初めての实战で、ろくな戦闘訓練も受けていないドロウトのルーカーが、ここまで生き延びた事こそ奇跡だ。

警察、消防団、その他の大人たちが、死に物狂いで走り回り、車両や土嚢を使ってバリケードを築き、時に銃を撃って応戦した。

空港が落ちなかったのは、彼らの命をかけた組織的抵抗のおかげであり、生徒達はむしろ守られる側だった。

「住民の避難は、どれくらい進んだの？」

「ほぼ完了だつてさ。非常時なのに、いや、非常時だからかな、皆助け合ってるよ」

「強いな」

「いい大人だ。ちょっとだけ尊敬する」

わははと、生徒達は笑う。

彼らは、身勝手な大人たちが呼んだ戦争だと思っていた。普通の戦争なら、侵略軍と戦うのは軍隊の役目のはずだ。

それが、彼らのような兵士とも呼べぬ見習い魔術師や、民間人が防戦している。

理由はわかってる。

軍が動けないから。

非常時における法整備がまったくされていなかったから。

そもそも、隣国が核実験を行う前に制裁措置を取り、実験された時点で何らかの形で核弾道弾発射基地を攻撃できる手段を所持していれば、七つの核弾頭が着弾する事も、こうやって侵略を受ける事もなかったのではないか？

専守防衛を謳いながら、防衛策を何一つ準備しなかった大人たちに、彼らは失望し、憤慨した。

若かった。

世の中、そんなに簡単に変わらないことを知るには、生徒達は幼すぎた。

無言で働く大人たちの背が負った物を知るには、まだ、未熟だった。

だが、そんな子供だからこそ、足掻こうとしたのかもしれない。

「なんか、入り口の方、揉めてね？」

「ああ、市民団体の代表が苦情に来てる。御嬢とあまりものが相手してるよ」

「どんな苦情？」

「この街が攻められたのは俺達のせいだから、立ち退きにかかる金とその他諸々を保障しろだとさ」

「……キレてね？」

「てゆうか、攻めてきてる相手に言わんのか」  
キャンプが重い空気に包まれる。

怒るとかいう以前に、気力がまったく湧いてこない。

「短気なお嬢にしちゃ信じがたい執念で粘っているな」

「よくやっているよ」

「連中はああやってゴネて、賠償や慰謝料ぶんどるのが仕事らしい

から」

「まさに『プロ市民』だな。あれ、プロレタリアの略だっけ？」

「そんなことしてる暇があったら、真面目に働けよ」

「働いたら税金が国家に行くから駄目なんだと。あと、生活保護がもらえなくなるらしい」

「なんじゃそりゃあ？」

「待て。彼らは市民の為に運動していると主張しているぞ」

「違う。それ違うから。『プロ市民』の為だから。恵まれない私に愛の手を、だから」

「そついや、一般庶民にや手の出せない高級車乗り回しながら、売りもせずに、うちの子の為に愛の募金をなんていう家があったなあ……」

そんな風に生きた死体が毛布の中でだべってる間、受付にいたフローラ・ワーキュリーは、白いひたいに青筋を立てていた。

いかにも貴婦人といったたちの女性。この泥だらけのキャンブに不似合いな、高級そうなスーツがなおのこと勘に障る。

出来るものならば、パイプ机をぶん殴って立ち上がり、頬をひっぱたき、外へ出る。これが戦争だと怒鳴りたかった。

「戦争はいつの時代だって、自衛から始まるんです」

「はい」

攻めてくれば、防戦せざるを得ないでしょう。それとも黙って殺されと？

「あなた達はどうして敵と手を取り合おうとしないのです？ 話し合おうとしないのです？」

「ええ」

交渉なら政府が飽きるほどやりました。

その上でお向こうは、我が国の民間人を攫い、テロ工作団体で化学テロを行い、武装強盗団を流入させて、物理的手段で以って我

が国を攻撃してきました。

「どうして譲ろうとはしないのです？ どうして相手を思いやらないのです。話し合えばわかりあえるはずです」

「はい」

強姦魔に襲われて、レイプさせると言われて、ここまでだけならOKよ、とでも言うのが思いやりですか？

どこの痴女か！ 抵抗して助けを呼んで蹴り飛ばして通報して自分の身を守るしかないのに。

「いいですか？ あなた達も兵士ならわかるでしょう。

死ぬのは何の力もないわたし達なんです。政府の偉い方達は安全な場所にいて、危なくなったら逃げるだけなんです」

「……」

ふざけるな、と言いたくなった。

王国の歴史上、そんな恥ずかしい行為をした司令官や政治家はいやしない。

幾度かあった敗戦のときも、戦犯として無理やり罪を押し付けられ、民を守るために悪役として裁かれた。

「わたしがあなたの立場なら、とても武器なんてもてやしませんよ。ちゃんと隣国の言う事を受け入れて、思いやって、いがみあわないように努力して、そうすべきなんです。

なのに、あなた達ときたら、平和を愛する人間として恥ずかしくないのですか？」

「……」

このひとは、と、フローラは心に冷たいものを感じた。

このひとは、戦争を自国が起こすものだと思っている。

隣国が、常に和を重んじ、互いに譲り合い、ともに手を取り合っている。いける良心的な存在だと勘違いしている。

隣人が攫われても、隣人が傷つけられても、自分は戦わなかったから悪くない。

自分は相手を傷つけなかったから悪くないと思っている。

今、一方的な悪意と欲望から、ナイフを振りかざして、斬りつけて来ているのは向こうなのに。

戦争は、自分が起こさなくても、向こうから吹っかけてくるものなのに。

七つの核を落され、侵略されてなお、「何もしないことが正しい」と信じている。

それは、命を見殺しにするのと同義語なのに。

「はつきり言いましょう。

あなた達の存在こそ平和への障害です。

あなた達のような人がいるから、この街は襲われた。

すぐに武装を解きなさい。

今日、死んだあなたたちの仲間、自業自得とはいえ、犬死です」

「……」

あ、駄目だ、と、フローラは思った。

死んだ仲間達の顔が、目の前にいる女達を守るために死んだ友達  
の顔が、侮辱された。

右手が自制心を振り切って、空を切る。

瞬間、隣で沈黙していたルドウインが乱暴な音をあげて立ち上がった。

バチン、と、高い音が響いた。

フローラがルドウインの右頬をぶったのだ。

「落ち着いて、外で頭を冷やしなさい」

ルドウインは、紅葉の浮いた頬を痛そうに撫でると、「悪い」と  
呟いた。

そのまま、奥に歩き出す。

ごめん、と、フローラはその背に向けて心で謝った。

悪役を押し付けてごめん、止めてくれてありがとう、と。

「無礼な。そもそもあなた達は……」

いい加減、話を終えなければならぬ。

これでは士気に関わってくる。

フローラが息を吸い込んだとき、新たな来訪者が現れた。

「ちよつとすまんあ。

お取り込み中悪いんやけど、ちよつと話聞いてくれへん？」

泥だらけのコートを着た、ショートカットの女だった。

今まで、外の作業を手伝っていたのか、化粧もおちて、かけた眼鏡も汚れている。

「なんですか。無礼な。

わたしを誰だと思っているのです？」

わたしは慈善事業団体”平和の使徒”幹部の」

割り込まれて憤る婦人に、コートの女が微笑みかける。

「ああ、あの有名な。

白い薔薇運動、私もよう知つとるで」

「そうですか。

白い薔薇のアクセサリを平和の祈念に購入していただき、その売上を恵まれない国に寄付する。

わたし達の誇るべき運動です」

「うん。知つとる。知つとる。

あんたらの公表した売上が、他国に一銭も寄付されずに、他の市民団体の活動費にあてられとったこともな」

「……そのどこが悪いのです？ わたし達は信頼できる団体に寄付しました。募金詐欺とでもいいたいのですか？」

「わー、こわ。

そないに怒らへん。怒らへん。

ただなあ。あんたらの寄付した団体にな、この国に弾道弾打ち込みくさった国とねんごろな団体がいるんや。

もし、白い薔薇の募金が弾道弾の製造費にあてられとったら。

あんたら、平和の使徒どころか悪魔の使者やな」

貴婦人の頬がひきつった。何者です？ と問いかける。



コートの女性は、薄汚れた鞆から名刺入れを取り出し、渡す。

「マリー・キャリング。ジャーナリストや。」

ちよつち、こののひとに用があつたんやけど、あんたも取材させてくれる？」

「お断りします！」

貴婦人は手早く荷物をまとめると、逃げるようにキャンプから走り去った。

「災難やつたなあ」

フローラはげっそりした顔で、人懐っこい笑みを浮かべるコートの女性を見上げた。

この上、ジャーナリストの相手などしたら死ねる、と隈の浮いた顔に書いてある。

「悪いんやけど、街の外へ取材に出たいんや。一人貸してくれんかなあ？」

10

「街の外へ取材に行く？ 何考えてるんですか！」

今は戦鬪の真つ最中ですよ。

死ににいくようなものです！」

ふんわりとウェーブのかかった髪を逆立てるようにして、フローラはマリーにくっつかかった。

「だから護衛つけて欲しいって頼みにきたんやんな、一人でええから貸してえな」

マリー・キャリングは、眼鏡奥の目を柔和に細めて、両手をあわせて頼み込んだ。

「無理です。見殺しにはできません」

「そこをなんとか」

「なんとも出来ません！」

バチバチと（一方的な）火花が散る。

マリーが頼み込み、フローラが拒絶する。

そんなやり取りを何度か繰り返していると、テントの入り口から声が響いた。

「落ち着いてよ。フローラ。」

丁度偵察を出そうと思っていたところだし。

ルドウイン。頼めるかな？」

「了解。アザ」

警察、消防団を中心とした自警団との打ち合わせに行っていた、アザード・ノアが帰ってきた。

彼もまた、フローラ同様に、ひどく消耗している。

「ふざけないで。いつまた敵の攻撃が始まるかわからないのよ。」

そんなところに、行かせるなんて」

「大丈夫。今夜はもう、連邦軍の攻撃はないよ」

「どうしてそんなことがわかるのよ！」

「夜、彼らが警戒するのは、僕達じゃなくて、王国海軍だから」

アザードの指摘に、フローラはあつと息を呑んだ。

どうやら、彼女もまた冷静さを失っていたらしい。

軍隊の存在意義は抑止力にこそある。

連邦軍の装備は、寄せ集めの民間守備隊はともかく、王国正規軍に比べれば明らかに劣り、夜目が効かない。

下手に昼夜を問わず交戦を続けられ、背後から王国海軍の奇襲を受ける、そんな可能性だってあるのだ。

だから、敵の司令官は夜間攻撃を行わず、本陣へと撤退したのだ。

「ゲオルク・シュバイツァー。」

案外に冷静で慎重な指揮官だよ」

「味方ごと魔術攻撃で吹き飛ばす男のどこが冷静よ？」

「あちらにはあちらがわの考え方があるんだろう。」

僕は理解したくないけれど」

「あたしはっ」

「いいよ、フローラ。俺が行く。」

アザ。明日も大仕事だ。

久しぶりの外泊だからって張り切るなよ」

「えっ。ぼ、僕は」

「くたばってきなさいっ」

右頬には手形を、左頬には投げつけられたキーホルダーの跡を残したルドウインは、夜着をまとって外へ出た。

キャンプの外では、黒いコートを纏った、妙齡の金髪の男性と女性マリィを待っていた。

「クリストファ。アリオーシャ。許可はとったわよ」

「こんな子供が役に立つのか？」

「自警団が取材の条件につけたんだから、しょうがないじゃない？」

アザードは、自警団と交渉して、色々とゴタゴタをまとめているらしかった。

その関係で何か仕事が回ってきたらしい。

「あんた達、白妖精族か？」  
エルヴン

男性の耳は少しとがっている。

女性も人間族ではないようだ。

「ああ。俺はクリストファ・アームズ。見ての通りのエルヴンだ。

彼女は」

「アリオーシャ・マスハドフ」

女は、俯き気味に、小さな声で自分の名前だけを名乗った。

四人は徒歩でスカイナイズ市を移動し、街道に出た。

「光学迷彩と気配遮断の結果を起動します。動かないで」

ルドウインが、フローラが投げつけたキーホルダーに、必要な魔術文字を書き込む。

瞬間、球状の魔方陣が周囲を覆い、まるで硝子が張られたように、四人は世界から断絶した。

「空間の遮蔽」だって。とんでもない魔術だな。君は、本当に見習いか？」

クリストファが驚いたように感想を述べる。

「俺じゃないです。フローラは空間魔術の天才だから」

「うちも、そこそこ魔術は見たことあるけど、こない見事なんは初めてや。まるで」

巨人族……と、続けそうになって、慌ててマリーは誤魔化した。

ルドウィンもあえて触れない。

そう、三人の魔術は『違う』のだ。

彼らの師は、王立魔術学院の師匠だけでなく、あらゆる意味で規格外だった、ルドウィンの義姉、ヴァール・ドナク・アーガナストの影響を受けている。

「（天才か）」

フローラは確かに天才だった。

姉に追いつき、追い越そうと努力を重ね、同期ではアザードを除けば、誰も叶わないほどの魔術の才を見せつけた。

得意の空間魔術と魔術道具の作成に限定すれば、教官達すら上回りがねないだろう。

そして、アザード。最も濃く義姉の知識を受け継いだ、あらゆる魔術を使いこなす万能魔術師。彼の魔術師としての技術は、すでに一流とついていい。

それでも。

「（たとえ”今”の二人が組んでも、きつと”昔”の姉さんにさえ届かない）」

あらゆる意味で規格外だった少女。

義姉がいれば、テリーは死なずに済んだだろうか？

わからない。

ただ確かな事は、今、義姉はおらず、三人は命の危機に瀕してい

るという事だ。

アザードの推測どおり、連邦軍は街道はおろか、隣の市からも完全に軍を退いているようだった。

「（王国の空海軍を警戒しているのか）」

なんということはない。

命を張って散っていった自分達の抵抗よりずっと、戦わない王国正規軍が連邦軍を足止めしている。

ルドウインは泣きたくなった。

なぜ戦わない？ なぜ自分達を救ってくれない？ 国民を守らない軍など何のためにいる？

問いかけは常と同じところへ舞い戻る。

法律の未整備。専守防衛を謳い、過剰に軍を縛り付ける憲法の存在。

王国は自らを滅ぼす法と憲法を黙認していた。

だから、これは自業自得。

マリィ、クリストファ、アリョーシヤ。

ジャーナリストの三人は、暗視カメラで街道の情景をフィルムに収め、ついに隣の市へと入り込んだ。

電撃的な宣戦布告と同時に、逃げる時間もなく陥落した、その街は虐殺場だった。

街灯に吊られた死体、建物に磔にされた死体、五体をバラされた死体……。

そして。

ルドウインは、血で汚れた熊のぬいぐるみを手に取った。  
持ち主らしい年端もいかない女の子は、暴行されて、殺されてい

た。

「なんでだ。なんでこんなことが出来るんだ！」

結界の中でルドウインは啼く。

「俺たちは平和に暮らしていただけなのに。  
どうしてこんな目にあわなきゃいけない！  
どうして。どうしてこんなことに！？」

市民団体の貴婦人の言葉が脳裏に響く。

俺たちの存在が侵略を招いたのか。

戦うことが罪なのか。

どうすれば良かったのか。

「馬鹿じゃない？ 弱かったからでしょう？」

ずっと沈黙を守っていたアリョーシャが、軽蔑するとばかりに吐き捨てた。

「え？」

「私の故国はヴァン神族の国に無理やり吸収されたわ。

経済は破壊され、農地は踏みじられ、資源は奪われた。

今も、ヴァン神族の軍隊が暴政を敷いている。

こんなこと、どこにだってありふれてることよ」

アリョーシャの瞳はどこまでも暗い。

「そうだな。こんなことは世界中でありふれているよ。  
半世紀も平和で繁栄を享受した。それこそがむしろ奇跡だね」

クリストファが何を呆れた事と哀れみを込めた視線でルドウィンを見た。

「人に欲望がある限り戦争は起きる。それを阻むものは何だと思う？」

「外交とか」

「違う。軍事力だよ。」

欲望のままに武力を振るう国が現れたとき、それを阻めるのは同じ武力だけだ。

攻め入ればただではすまない。

そのデメリットこそが侵略を阻む」

「けれど、王国は軍縮を進めて……」

「その代わりにアース神族に護つて貰っていた」

「ただじゃない。」

同盟して、土地を提供して、国債を買って……」

外交官だった父から学んだ知識を総動員して、ルドウィンは訴えた。

「ああ、そうだよ。君たちは、お金で平和を買ったわけだ。」

血も汗も流さずに」

「違う！」

「違うさ。」

結局君たちのやっていたことは、

『僕は殺したくないから、他のものが手を汚せ』だ

何が専守防衛だ。たいした偽善の国だよ、この王国は」

「違う……」

ルドウィンの心は壊れそうだった。

テリー、貴婦人、アリョーシャ、クリストファ、死んでいった学友、殺されたこの街の人々、目の前の女の子。

頭の中でぐるぐると回り、いまにも吐き出しそうだった。

「俺は、俺たちは……！」

最後に、脳裏に浮かんだものは、懐かしい義姉の顔。

巨人族が、アース神族の基地を星落しの禁呪で破壊し、第一位契約神器『ガングニール』を奪った。  
フオビドゥンスベル

世界の軍事均衡は崩れ、最終戦争が始まった。  
もう守ってくれる国も、人もいない。  
どの国も自分のことで手がいっぱい。

そうだ、思い返してみろ。

アリョーシャの国がヴァン神族の圧制を受けていたにもかかわらず、自分は無関心だったではないか。

自分を守るのも、自国との自国の民を守るのも。  
自分とその国に住む者しかないのだ。

「（ごめんな。守ってやれなくて）」

ルドウインは少女の身体についた汚れをハンカチで拭くと、彼女を抱きしめた。

炎の翼が背から生まれる。

結界の中で、ルドウインは彼女を茶毘に付した。

「（戦おう。戦うことは間違いかもしれないけれど。  
戦わずに見捨てる事はもっと大きな間違いだ）」

ずっとずっと義姉のような魔法使いになりたかった。  
でも、ルドウイン・アーガナストは、ヴァール・ドナク・アーガ



ナストには成り得なかった。

「（今日、この日より、ルドウィン・アーガナストは牙無き者の為の牙となる）」

それは、彼が決めた、たった一つの誓約。

魔術師ルドウィン・アーガナストは、この約束を胸に走り続けた。たとえ、その先に待つものが、紅蓮の業火に包まれた破滅の日々であつたとしても。

「結論は出たね。

明朝、日の出と同時に滑走路を爆破、スカイナイブズより撤退する。

夜の防衛は、自警団が請け負ってくれるそうだから、好意に甘えて休もう」

キャンプの広場に集まつた生徒六十六名に、アザードは交渉の結果を伝え、お開きとなった。

あらゆる知恵を絞っても、現在戦力での空港の死守は不可能だつたからだ。

「アザ。そいつは違う。今は攻めるべきだ」

最後の一人、偵察に出ていた67人目が帰還した。

「ルドウィン。気持ちはわかるけど、無理だよ。

どれだけ守っても、兵力差は絶望的だ。

それに、向こうにはノートウングがある。

勝ち目はゼロだ」

「だったらノートウングを分捕ればいい。

それで一挙に逆転だ」

「いい加減にしろ。僕は、今ここにいる67人の命を預かっている。

夢物語で皆を死なせるわけにはいかない」

「夢物語じゃない！」

ルドウィンが怒鳴った。

「連邦軍に航空戦力は無い。その急所を突く」

「こっちだって同じ……え」

アザードは、はっとした。

航空戦力はある。

他の誰かならいざ知らず、自分達は魔術師だ。

そして、『お姉ちゃん』から『翼』を受け継いだ、幼なじみが目

の前に立っている。

「エリス！ ノートウングの場所は探知できる！？」

魔力探知に長けた学友をアザードは呼んだ。

「ええ。出来るけれど」

「戦略を立て直す。

目標は第三位契約神器ノートウングの奪取、もしくはその盟約者の排除。

フローラ。市街戦で敵を引きつけるから、地図を持ってきて」

「了解。そうでなくちゃっ」

作戦は変更された。

ルドウィンは休むようにとのアザードの忠告を受けて、一番静かな受付のテントへと移動した。

そこに、幼い、義姉と会った当時のルドウィンくらいの年齢の少年が、所在無く立っていた。

「どうしたんだ？」

「お父さんがね、警察官なのにね、逃げるって」

自警団の撤退は、もう決まったことだ。

「お姉ちゃん、兵隊で、戦って、帰ってこないのに逃げるって」

「（国境警備隊の兵士か……！？）」

「おれ、お姉ちゃんを探さなきゃ」

わしゃわしゃと、ルドウィンは少年の髪をかきむしった。

「俺が必ず見つける。だから、坊やはおうちへ帰りな」

「信じていい？」

「任せろ。男と男の約束だ」

そして、夜明けとともに戦闘は再開される。

アルト・シュターレンの元には、王国守備隊が『眠りの雲』の魔術を撒き散らし、兵の侵攻を押しとどめているという連絡が入っていた。

下水道、上水道をも使ったレジスタンスじみた市街戦で、敵を捉える事ができないと。

「構いません。空港さえ手にいれれば、この戦いは勝利です。」

各部隊の指揮官に至急連絡を届けてください」

「それが、指揮官だけを集中して狙撃されています。農奴兵達は、ばらばらになって略奪を……」

通常、軍隊とはシステムだ。

将校が撃たれば士官が指揮を執り、士官が戦闘不能になれば下士官が指揮を執る。

けれど、連邦軍は違う。

指揮を執るものと、指揮に従うもの。

その二種類しかいなかった。

指揮官の恐怖から解放された兵士達は、狂乱状態になっている。

「人の心は恐怖では縛れない。

人を動かすものは、そんなものじゃない」

愛とか、絆とか、そんな言葉にすればつまらないもの。

それこそが、最後に人が縋り、心に燃やすものだ。

「副官殿。何を……」

「私が直接指揮を執ります。

ゲオルク司令に許可を……」

彼の意識はそこで途絶えた。

スカイナイブズから二つの街を隔てた都市の小高い山にあるホテル。

対空、対地の各種装備で要塞化した絶対安全圏、総司令部を、一人の魔術師が穿ちぬいた。

「バンカーバスタアアア」

背の炎の翼を足元で掘削機状にまとめ、ルドウインは空間転移したホテル屋上から二十階分ぶち抜いた。

地下五階。そこに侵略者の指揮官がいる。

スイートルームもかくやとばかりに広げられた部屋に着地するや、襲い掛かる敵意の塊に機敏に反応し、部屋の外から飛び込んでくる見張りの兵に、突撃小銃を浴びせかけた。

ついでに、爆風の魔力が付加された手榴弾を叩き込み、完全に入り口を破壊する。

「おいおいおい。なんて狂った真似しやがるんだ」

部屋の主は、黄金の魔剣と、6人の半裸の女性を繋いだ鎖を手にした男、ゲオルク・シュバイツァーは、至福の表情を浮かべた。

「戦争にもルールはある。

捕虜の虐待、民間人拉致。

あんたは国際法に違反している！」

ルドウインは小銃をゲオルクに向かって構えた。

「ルールだとお」

ゲオルクは耐えられないとばかりに破顔一笑し、4つんばいになった女性の腹を蹴った。

その勢いを利用して鎖を引き、射線の中に割り込ませる。

「あんたって奴はっ！」

女の腹を蹴る。

それがどういう意味か、目の前の外道はわかっていないのか。ルールなんぞ、強い奴が、勝った者が決めるのよ。

戦勝国が一方的な裁判で『平和への罪』で敵国の軍人を裁く。それが正しい世界のあり方だ！」

ゲオルクは笑わずにいられない。  
戦争そのものが平和への罪であり、そこには戦勝国も戦敗国もない。

だが、線引きをするのは明確な一線だ。  
どちらが正しかったかではない。  
どちらが勝ったかだ。

「さあ撃て、撃ってみろよ。鳥野郎。撃てるものならなあ」  
撃てば確実に女性達も被弾する。  
それを知って、ゲオルクは哄笑する。

「……」  
ルドウインは、盾にされている女性を見た。  
意思の光を失った瞳。  
暴行の跡も痛々しい顔と体。  
彼女が纏っている衣服は。

「（王国の軍服）」  
信じていいかと少年は尋ねた。  
任せると、男と男の約束だとルドウインは応えた。

「わかった」  
ルドウインは小銃を捨てた。  
「いい子だ。褒美にお坊ちやまに教えてやろう。  
戦いには絶対のルールがある。  
殺して殺して、犯して、  
につつ込んでぶっ壊す。  
その為にオレは戦争やってるんだよ」

自分の奥歯の折れる音を、ルドウインはまるで他人事のように聞いた。

「そつかよ!」

ノートウングを手にしたゲオルクが切りかかってくる。

鋼すら断ち切る斬撃を、ルドウインは背から前面に展開した炎の片翼で受け止めた。

同時に、鎖をもう一方の炎の片翼で焼き切る。

ゲオルクの隻眼が信じられないものを見たばかりに、大きく見開かれた。

その隙に、ルドウインは、緊急脱出用に預けられた、空間転移の術がかけられた指輪を発動させる。

「フローラ。捕虜と拉致された民間人を転送する。任せた！」

データリンクした幼なじみが、戦争でヒーローごっこしてんじゃないこのカスボケ、修正してやるから覚えてると耳元で怒鳴っているが気にしていられない。

「魔術師。貴様、女の名前を言ったな。

この瞬間に国の未来が決まったぞ。

王国中の女を列車に乗せて犯しながら、貴様ら王国兵の皮をはぎ、四肢を解体してやるう」

「未来だって？」

お前に未来は残さない。この俺が骨も残さず焼き払ってやる」

炎翼と蛮剣がからみあい、火花を散らす。

「神器と打ち合う魔術だと、貴様いつたい何者だ！？」

「俺の主神に遣わされた使者さ。」

砕ける。勝利を約束された剣！！」

## 第六話 転機

11

ルドウィン達が小等学校を卒業した日、『お姉ちゃん』は、森から遠く離れた海辺へと三人を連れて行ってくれた。

蝶の羽のように美しい炎の翼をはためかせたヴァールと手を繋ぎ、輪になったルドウィン達は空を飛んで浜辺へと降りたつた。

荷物を日除けの傘の下に放り出し、靴を脱いで素足で駆け出した。

『これが海っ。青いつ、大きいっ』

麦藁帽子をかぶったフローラが、白い素足で波を蹴るようにはしやぐ。

『いい風だ……』

アザードが眼鏡を外して、赤毛を風になびかせる。

『早く泳ごうぜっ』

ルドウインは、服を投げ捨てて、水着一つで飛び出した。

『水かさが腰より深い場所に、入っては駄目だぞ』

ヴァールは、そんな三人を優しい瞳で見つめていた。

あの夏の日を忘れない。

照りつける日、フライパンの上みたいな砂浜、磯の匂い。

波のしぶき、空を渡る風の冷たさ。紫に染まる黄昏の雲。沈む金

色の夕日……。

義姉と遊んだ最後の日、4人で過ごした最後の時間を。

日が沈んだ後は、ルドウインとアザードが釣った魚を焚き火で焼いて、フローラが作ったサンドイッチと一緒に食べた。

透き通るほど澄んだ、満天の星空の下。

ヴァールは、中等部入学のお祝いだと、三人に贈り物をくれた。



アザードには、大切にしていた杖を。

フローラには、決して触れさせなかった魔術道具作成の為の道具箱を。

ルドウインには、己が編み出した『翼』を生み出す術式を。

思えば八年前、聡明な『姉』は、現在という『未来』を予想していたのかもしれない。

真実は不明のまま、ただ三人は、直後に行方不明となった姉を探そうと、魔術師への道を走り出した。

スカイナイブズの地下に、蟻や蜘蛛の巣のごとく広がった地下道や水道跡を利用して、国立アーク魔術学院の生徒達は今もぐら叩きのもぐらのように移動して、初歩の魔法である『眠りの雲』を撒き散らしていった。

『眠りの雲』とは、煙状のガスを噴射して、吸った者を強制的に眠りへと落す簡単な呪法だ。

ガスマスクなどの簡易な物理装備や、抵抗魔術を込めたペンタグラムなどの標準兵装で無力化できる程度の、初歩呪文に過ぎない。

だが、圧倒的多数の兵力と引き換えに、武装と練度を削られたミッドガルド連邦兵に対しては絶大な効果を発揮した。

「なるほどね。圧倒的な陸軍力といっても、脅威なのは数だけ、か。

比べたくはないけれど、ヴァン神族の方がよっぽどたちが悪い」  
アリョーシャ・マスハドフは、誰もいない百貨店の屋上へと上り、  
雲霞の如く徘徊する連邦兵を見下ろした。

訓練と戦闘で擦り切れた不ぞろいの軍服を着た兵士達の中で、ひ  
ときわ目立つ高価な軍服を着た指揮官を探す。

「マリーはもう逃げたかしら？ いちおう、助けられた借りだけは  
返しておくわ」

鈴を象ったペンダントを外し、空へ掲げる。

「来なさい。第六位契約神器エルヴンボウ」

刹那の光を発した後、アリョーシャの腕に抱かれたのは、身の丈  
ほどに長い無骨な狙撃銃。

「いくわよ、ベル。術式        ”千里眼”        起動」

「ヤー（了解）！」

長大な銃身を肩と肘で支え、コンクリートの床に伏せた狙撃手は、  
己が愛銃を撃ちこなった。

白いガスの中で、標的が崩れ落ちるのを、蒼く輝くアリョーシャ  
の瞳が視認する。

彼女が抱いた狙撃銃は、ただの狙撃銃ではない。

契約によつて千里を見通す魔力を使い手に与える契約神器だ。

自ら意思を持ち、盟約を交わした主と共に戦う神器の力は、ただ  
の魔術道具とは比べ物にならない加護使用者に与えてくれる。

「この国の間諜対策は致命的よ。わたしのようなテロリストが入り  
込めるのだから」

国を失った後の民の末路は悲惨だ。

そのような現実も知らずに、能天気な平和を謳歌するこの国がア  
リョーシャは憎くて仕方が無かった。

でも、優しかったのだ。この国は。得体の知れないヴァン神族で  
も受け入れるほどに。

「だから、これは恩返し。次に来るときは、きっと敵だから」

「なんで、俺は金にもならない戦いをしてるかね？」

クリストファ・アームズは、生徒達と一緒に走り回りながら、突撃小銃を掃射して防戦していた。

「マリーの奴に乗せられたせいかな？ 俺もヤキが回ったな」

彼は元傭兵だった。

雇われの外国人部隊に入隊して、聖地奪回を掲げる黒妖精族の原理主義者たちと戦って、戦って、戦い抜いて、除隊した。

そして、報奨金と引き換えに気がついたことは、自分がとつくに壊れていた、ということだ。

ぬるま湯のような生活が気に喰わない。吐き気がする。

死と隣りあわせで、殺して、殺されて、そんな生活じゃないと気が休まらない。

「ま、なんだ。爆弾抱えて突っ込んでくるガキや老人よりも、殺り易くはあるな」

聖戦を謳い、民間人を騙して使い捨ての兵器に変えるゲリラどもに比べれば、金で外人部隊を雇う先進国の方がまだしも理性的だという価値観を、クリストファは持っていた。

同時に、そんな情勢不安の国々を作り出して、自分は見ぬふりをするヴァン神族とアース神族を心の底から呪っていた。

「ああ、そうだ。嫌いな国がもうひとつあったよ。」

王国からのODAを横流しで、ゲリラどもを援助して、武器を売りつけてるイカれた国が。

ミッドガルド人民連邦。お前達のことさっ」

クリストファの射撃に怯えたか、連邦兵達はやたらめたらに突撃銃を乱射して、火線を浴びせてくる。

「起きろ、相棒。一気にカタをつける」

「イエス、サー」

ベルトに挿した、ペーパーナイフを横薙ぎに振るう。

「術式      ” 剛毅 ”      起動」

クリストファの手に握られたペーパーナイフは、巨大な大剣へと姿を変え、刀身から飛び出した魔術文字が円形の盾を形作って弾幕を受け止めた。

第六位契約神器ルーンブレード。主とともにあまたの戦場を駆け抜けた剛剣。

「こういうのは反則だな。ここは戦場だ。相手が悪かったと思え」盾に守られたクリストファは大剣を振り上げ、そのまま敵兵達に向かつて叩きつけた。

剣から生み出された衝撃波が、道路の街灯や看板ごと一個小隊を薙ぎとばす。

「故郷へ帰れ。待ってるやつがいるならよ」

マリー・キャリングは、衛星通信機能のついた情報端末で、生徒達の奮闘と連邦兵の無道を発信し続けた。

彼女はフリーのジャーナリストだ。

民衆の味方。第4の権力。情報の担い手。

褒める言葉は数あれど、あまり綺麗な世界とは言えない。

記者クラブに詰めたまま、政府広報を『スポンサーに都合の良いように改竄して』流すだけの大手メディアや、伝手を作るためなら平然と枕営業が横行する世界。

そんな良くないイメージが。マス・コミュニケーションには、根付いてしまった。

「結局、自業自得なんよね。

今までマスコミは、『悪いことしました』っていうサクラを作ったり、毛色の変わったほんまもんの悪党の悪事を、まるでそいつのいる集団、国、すべてが行った悪事みたいに報道してきた。

その癖、スポンサーや自分とこの悪事、一部の国のめちゃくちや

な暴挙には、まんま目をつぶる。これで信頼せいゆうほうが無茶や」  
一部の悪党やろくでなしの暴挙が、マスコミ全体の悪と判断されたとしても、それは自分達が今までやってきたことが跳ね返っただけ。

「それでも、うちはジャーナリストであることに誇りをもつとる」  
マリーは信じているのだ。

時に感情的で、時に残酷で、時は無力なものを。

欲望のままに騙すために使われる『言葉』ではなく、真実に焦がれる『人の心』を。

「全部のジャーナリストが魂売ったと思うなや。」

昔からペン（情報）は剣（軍事力）よりも強しゆうてな。  
あんたらの悪事は、必ずうちが残さず余さず伝えたる！」

空港の管制室で、アザード・ノアとフローラ・ワーキュリーは全体の指揮を執っていた。

エリス・コードウエルをはじめとする感知系の魔術に長けた魔術師の伝える情報を処理し、前線の生徒達を的確に逃走路へと誘導する。

「これで二十人が脱出。ライツとシェリーは！？」

「第三道路沿いに逃げてもらう。ウィリアムは、大丈夫？」

「クリストファさんが助けに行ってる！」

市外への逃走路を演算しつつも、アザードとフローラの胸の中を焦りだけが膨れ上がってゆく。

理由は、わかってる。

二人の幼なじみであるルドウィン・アーガナストが、最悪のタイミングで指示を無視したからだ。

そもそもこの作戦は、連邦軍の追撃を振り切るための遅滞戦術だった。

眠りの雲で足を止めて、組織的な追撃を和らげつつ、これを囿に敵司令部を転移魔法で強襲する。

あわよくば、特攻攻撃を警戒した司令部が防御を固め前線部隊を呼び戻すかもしれないし、少なくとも多少の混乱を与える事ができるだろう。

アザードとフローラは、戦術目標に掲げた「敵大将を撃退、もしくはノートウングを奪取」が可能だとは思っていなかった。

ただ士気向上のため、ルドウインの夢想につきあったに過ぎない。敵司令部に一撃を加えて離脱。それだけで良かったのだ。

「あの、馬鹿っ」

フローラが思わず、机を平手で叩いた。

ルドウインは、自身の逃走の為の『転送の指輪』を、捕らえられていた民間人と捕虜の救出に使ってしまった。

フローラが作った指輪だ。その効力は誰より知っている。

六人分の転送などすれば、確実に充填した魔力は枯渇する。

「あいつは、死なないよ」

「アザード！」

「迎えに行こう。だから、今は、仲間の救出に専念しよう」

リーダーを流用した探知システムが、神器クラスの巨大な魔力反応の接近を伝えていた。

それも複数。おそらくは、第五位級契約神器『巨人機』の類だろう。

「そんな、無茶です」

「いくら貴方でもこれだけの人型戦車を一人で止めるのはっ」

周囲の静止を、アザードは振り切って、愛杖を手にドアへと歩き始めた。

フローラは止めもせず、幼なじみの背中へ向けて黒い円盤と金色の円柱を放り投げた。

「使っんでしょ？ 本気で『姉さんの杖』を」

「うん」

まるで空間魔術師がそうするのをわかっていたように、万能魔術師は後ろ手で二つの道具を受け止めた。

「フレイムは持つのか？ もう子供じゃないんだから、アザードの魔力に耐え切れないかもよ？」

「うーん。元が姉さん仕様だからね」

「何言ってるの、いつか必ず越えるんだからっ」

「うん。いつか必ずね」

アザードは振り返った。

取って置き、笑顔を作って、噛まないように微笑みかける。

「フローラ。帰ったらさ、結婚しよう」

「なっ」

返事は聞かない。

聞いたら戦えなくなる。

フローラの雄たけびと、通信術師たちの黄色い歓声を背に、アザードは駐車場へと駆け出した。

8年間一緒だった木の杖を、強く強く握り締める。

思えば八年前、聡明な『姉』に、現在という『未来』が予測できなかったはずは無いのだ。

たとえ七つの鍵が生み出されなくとも、必ず巨人族は神々へと反旗を翻しただろう。

そして、アース神族に守られ、アース神族を支える王国は、必ず混乱の坩堝へと叩き込まれる。

「だから、でしょう」

アザードは問いかける。

もういない幼なじみ、三人の姉に。

「姉さんは知っていた。だから、これを作って、そして、僕に渡したんだ」

ヴァール・ドナクと同じ万能魔術師であるアザード・ノアに。

自分が作り、使うはずだった兵器を！

「アンロック。目覚めよ、第六位契約神器マジックスタッフ」

主の声を認識した魔道の杖は、待機形態である杖から、変形を開始した。

杖の頭部が割れて二又の銚を形作り、胴からは上下左右に弓状の突起物が出現する。

何重もの魔方阵が円を描いて十字の弓の弦となり、杖を覆い始めた。

「おはようございます、マスター。三日と三時間四十六分二十九秒ぶりです」

「おはよう、ユミル。元気かい」

「イエス、マスター。また、訓練ですか？」

問いかける愛杖の意思を前に、アザードは悲しげに首を横に振った。

「うっん。実戦だ」

「……主の望みのままに」

杖の柄が開き、蓮根のように穴の開いた弾倉がせり上がってくる。

アザードは、フローラから預けられたスピードローダーを使い、

金色の弾丸を送り込んだ。

チャージバレット  
「弾丸装填」

廊下を走りぬけ、駐車場へと飛び出す。

全長6レクスはあるだろう、巨大な人型の機械人形が八体、兵士達を伴って空港へと近づいてきていた。

ウィザード  
「万能魔術師が、軍事において、最強と呼ばれるゆえんを教えてください」

魔法使いは、ルーン文字を媒介に世界を書き換える。

使える文字には個人差があり、火を燃やす事得意とする者、会話や思念を飛ばすことに長けるもの、遠くを見通すものなどさまざま。

だが、ヴァール・ドナクや、アザード・ノアのような万能魔術師



は、すべての魔術文字を扱える。

「火も、水も、風も、雷も、およそすべては、『力』を生み出すために存在する」

その力すべてを使うことが出来たなら。

「僕の生み出す力に、限界はない」

たとえ相手がカタログスベックで上回る怪物であろうとも。

「ならば、この僕に撃ち貫けぬものは何もない」

「術式      ” 貫徹 ”      起動！」

第五位契約神器フレイムジャイアント。

炎の巨人を模したミッドガルド連邦の陸上戦車は、その眼に付いた視覚素子で、空港に咲く花を見た。

魔方阵が幾重にも重なって作られた七色の薔。

巨大な華を支えているのが、駐車場に立つただ一人の少年だと知ったとき、操縦者はまるで悪い夢だと失笑した。

薔が開く。

積層型の魔方阵によって作られた、華を模した葬送の砲口が。

莫大な熱量を伴う極太の白光が、八体の巨人の上半身を町の建物ごと吹き飛ばし、薙ぎ払った。

「コンプリート」

愛杖の意思が、砲撃終了を告げる。

廃棄された葉莢が続々と真上に跳ね上がり、空から灰色のコンクリートへと叩きつけられた。

「ユミル。すまない」

砲撃の反動で、杖の全身にはヒビが入っていた。

「いいえ、マスター。」

何があるうとも、アザード・ノアと、ルドウィン・アーガナスト、フローラ・ワーキュリーの意思を尊重せよ。

それが、創造主の意思であり、私の望みです」

戦車を失った連邦兵たちは散り散りに逃げてゆく。

アザードは、街道防衛線で敵司令官から受けたノートウングの攻撃を思い出した。

「（足りない。僕の今の力では、あの男も姉さんも止められない）」

あの悪夢のような広範囲攻撃魔術を前にしては、切り札とも言える神器の能力解放も霞んで見えた。

「君が帰る場所は必ず僕が守る。だから、勝つて。ルドウィン・アーガナスト」

1  
2

あの日、義姉が何を思い、炎の翼を渡したのか、ルドウィンにはわからない。

けれど、この魔法は姉弟を繋ぐ絆であり、彼女を追うために自ら鍛え続けた最大の盾にして剣だった。

「どうした！ 大口を叩いてその程度か、クソガキ」

ルドウィンが背の炎翼から生み出す火球は、ゲオルクのノートウングが呼び出す掌大の竜巻に切り裂かれ、火花となって霧散する。

「こんちくしょうっ」

地下室での戦いは、圧倒的なまでにゲオルクが優勢だった。

ルドウィンは、作戦を始める前、アザードが告げたアドバイスを思い出す。

『解析によれば、ノートウングの力は”切断”だ』

神話において、鉄鋼を泥のように切り裂き、流れる川を切り裂き、何者も傷つけられぬ竜の鱗すら切り裂いた魔剣。

『街道での戦を見る限り、切断の力は広範囲で、遠距離にまで及ぶ。だから、足を止めての魔術の応酬じゃ、勝ち目は絶対に無い』

魔術の太祖が生み出した炎の城壁やら、魔竜の灼熱の吐息ですら叩き切った魔剣。

『だから、仕留めるなら。接近戦しかない』

だが、その所有者であるシグムンドは、戦神オーディンの槍によって、魔剣を折られ、息絶えた。

『あの あかい”切断の竜巻”を撃たれる前に、近接戦闘で先手を叩き込め』

ルドウインは、おたけびをあげて床を蹴る。

浮力を使って滑空し、回転とともに炎の剣と化した翼で、ゲオルクの後頭部へと廻って切りつける。

「面白い。面白いぞクソガキ！」

ゲオルクは、振り向きざま、剛胆に壘剣を斬り上げて、炎の一翼を半ばから切り捨てた。

そのままノートウングを袈裟懸けに斬りおろし、しかし、ルドウインの炎翼に阻まれる。

防げるのはわずかに一秒あまり。

しかし、その時間で、ルドウインは崩れた体勢を立て直し、翼を復元する。

「この高揚、この快楽のこそが戦場だ。

さあ、あがけ。もっとこのオレを楽しませろ！」

ゲオルクが笑いながらルドウインに斬りつけてくる。

小円を描き、球を描くような、ミッドガルド連邦独特の剣弧。

隙が全く見出せない、連続した剣を重ね、獲物の命を断ち切ろうとする。

「勝手なことを、言うなっ」

ルドウインは横っ飛びに跳躍して避けると、即座に翼の揚力を利用して、地面すれすれを滑走した。

ゲオルクの首と下半身を狙って、炎の翼剣で斬りつけて同時に足を払う。

「！」

「！？」

甘かった。跳ね上げるようなゲオルクの剣の軌跡は、ルドウインの足を寸断し、炎翼を断ち切ると、理解できた。

だから、寸前で、火球をばら撒いて、翼を使って後退する。

「フッ」

ゲオルクの唇が歪み、隻眼が笑った。

中途半端に撃ちだされた火球の隙間をはいくぐり、剣士は魔術師を猛追する。

手には、待機形態へと戻したか、大振りのナイフが閃いている。

軌跡の大きい蛮剣ならば避けることもできたらう。

だが、ナイフの突進を阻む術は、もはやない。

「鎖？」

寸前、ルドウインの目端に、捕虜と民間人を拘束していた鎖のきれっばしが映った。

とっさにつま先で引っ掛け、蹴り上げたのが吉と出た。

長い鎖が脚に絡みつき、ゲオルクは転倒を防ぐために意識をそらして、刹那のときを稼いでくれた。

「けはっ」

ルドウインの息はあがっていた。

勝てないと理解した。水準が違う。

技術も、武器も、何もかも、目の前の男の方が上だ。

「小僧。よくやった。これだけオレと打ち合えた戦士は、連邦軍にもほとんどいない。だが、ここまでだ」

「まけるか。たかが、たかが聖剣に」

ルドウインの精一杯の虚勢に、ゲオルクはどつと破顔した。

「おいおい。聖剣をたかがとはよく言いきった。  
だが、同感だ。」

ヴォルスंगाの柱につきたてられた選定の剣。  
引き抜いたシグムンドは運命を受け入れて死に、その子シゲルズ  
は愛という幻想を抱いてくたばった」

ゲオルクは、巨軀を震わせて哄笑する。

「運命も愛も知った事か。」

オレは、オレ自身でこの剣に勝利を約束しよう。ノートゥング

ともに敵の血をすすり、女を侵し、国家を瓦礫に変えよう。  
殺して犯して破壊する。

それがオレの望む人生だ」

ああ、と、ルドウインは理解した。

相容れない、と。

自分の望むもの、森での穏やかな生活、守りたいもの、すべてが  
目の前の男とは相反している。

「オレとともに来るか？ 小僧？ 血と快楽を保障してやるぞ」

「一緒にはいけないよ。あんたと俺は、きつと不倶戴天の敵だ」

「そうか、ならば死ね」

ゲオルクの構えたノートゥングに、風が吸い込まれる。

膨大な魔力が地下室を切り裂いて、第三位契約神器へと集中した。

「紅覇        ” 長征”        発動！」

ゲオルクが放った『切断』の力は、街道で放たれた竜巻に比べ、  
明らかに出力が絞られたものだった。

全力で撃ち放てば、地下室もろとも崩れて生き埋めになる。  
だからこそ、ギリギリの威力に絞って打ち込んだ。

炎翼を背負った少年の姿は、竜巻状に顕現した『切断』の魔力に切り刻まれ、ミキサーにかけられたミンチのように消失した。

「消えた、だとおおおっ」

ゲオルクが剛剣を正眼に構え、とつさに左後方へと後ずさった。有り得ないのだ。人を殺せば、必ず後が残る。血と肉と、はらわたのかけらが、赤い霧となって吹きすさぶ。

消えたのなら、それは、魔法で生み出された幻影に過ぎず、本体は。

「この瞬間を待っていたっ」

ルドウインが、地面すれすれを駆けながら、掌中に掴んだキーホルダーを握り締めた。

すべての魔力が枯渇した空間遮断の魔術道具は、先に魔力を使い切った転移の指輪と同様に、塵となって消える。

「そうか、小僧。貴様は、魔術師!？」

「ルドウイン・アーガナスト。あんたを倒す者の名だっ!」

少年の拳を赤い炎が包む。

振り下ろされるノートウングを横っ飛びに避け、炎の翼を再起動、転げる姿勢を無理やり制御する。

「届け! 俺の拳っ」

ありったけのスピードを載せて、ルドウインの燃える拳が、ゲオルクの厚い胸板に叩き込まれた。

決して折れなかった強敵が、初めて膝をつく。

拳から燃え移った炎は、魔剣の主の軍服に、一瞬でルーン文字を刻み込んだ。

「熱止!」

爆発する。

炎と風が地下室を満たし、ルドウインは勝利を確信した。

しかし。

「足りなかったな」

ゲオルクは軍服こそ燃えて、深緑のシャツ一枚になっていたが、無事だった。

「魔法は、ルーン文字を媒介に世界樹へと干渉し、己が意思で世界を書き換える力だ。

ゆえに、意思を持たない魔術道具と、意思を有する契約神器には、絶対的な壁が存在する」

ルドウインは、ゲオルクの意識が鎖に絡みつかれた足元に集中した瞬間、自らの意思でフローラのキーホルダーに込められた空間遮断の魔術と、幻影の魔法を使い、奇襲を試みた。

「オレがノートウングに勝利を約束したように、ノートウングもまた、オレに勝利を約束する。

ルドウイン・アーガナスト。貴様の切り札は、オレを越え、しかし、オレ達を越えられなかった」

「剣が、主を守ったのか」

あるいは、ルドウインの手に相棒たるなんらかの神器が握られていれば、結果は変わっていたかもしれない。

されど、決着にもしもはなく、ルドウインは持てるすべての術を使い切ってしまった。

破られた天井から、連邦軍の兵士達がロープを使って降りてくる。

「（死ぬ？）」

これが終わりだ。

勝ち目は無くなった。

ルドウインも、スカイナイブズも、制空権を握られるだろう王国も。

すべての命運が尽きる。

「（死ねない）」

それでも、まだルドウインは生きている。

生きている限り、生き続けねばならない。  
なぜなら。

「（俺はまだ義姉さんに会っちゃいない）」

炎の翼を広げ、ルドウインは飛翔した。

飛ぶ。

飛ぶ。

空へ。

高く　　。

地下五階より20階分を上昇し、屋上を突き抜けた。

ルドウインを待っていたのは、竜や巨人を模した戦闘機の数々。

10機は下らないだろう死の翼から、小さな火の鳥に向かって機  
関砲が浴びせられた。

人間サイズの的になど、そうそう当たるものではない。

だが、浴びせられた銃弾の雨は盾の魔術を粉碎し、一発がルドウ  
インの腹部を穿った。

落ちる。

墜落する。

最後の意識でルドウインは翼をはためかせ、そのままホテルの屋  
上へと落ちた。

「ヘッ。航空支援が今頃来たか」

ゲオルク・シュバイツァーは、空を舞う巨人達を見上げ、次に虫  
の息のルドウイン・アーガナストを見下ろした。

面白い敵だった。もう少し経験を積みれば、更に面白い闘いができ  
るかもしれない。

「ゲオルク司令、ご無事でしたか？」

煤と泥で、栗色の髪と整った顔を汚した、アルト・シュターレン  
が駆けつけてくる。



「ああ」

「賊は？」

ゲオルクは顎をしゃくるようにルドウインを指し、蛮剣を振り上げた。

「あばよ。ルドウイン」

その瞬間、上空の巨人機と龍型機が軒並み吹き飛んだ。

「なん、だと!？」

階下から伝令やら通信士やらが、泡をくって駆け上がってくる。

彼らは混乱し、泣き喚き、恐慌状態に陥っていた。

アルト・シュターレンが、まるで飢えた獣のような瞳で、ゲオルクを見つめた。

「沈黙していた王国軍が迎撃を開始しました」

副官は、混沌と化した現状から情報を分析し、報告する。

「核を撃たれ、国土に進軍を許した王国政府だぞ。なぜ今頃？」

「王国の民衆が動きました。」

子供に戦わせる政府などいらぬ。

国民を守らない政府に、国府たる価値などないと、叫んでいます。

ミッドガルド連邦が傀儡にした政党は、無条件降伏を叫んでいますが、もはや嘘にだまされる民衆は少ないでしょう。

なぜなら、降伏した先の未来の有り様を、彼らは見てしまったからです」

ゲオルクは苦笑いせずにはいらなかった。

たった三日、いや、たった二日半だ。

ルドウインたちの虫けらのような抵抗が稼いだ時間。

それがまるで白黒の裏返しゲームの角をとられたかのごとく、事態がひっくり返るうとしている。

「王国はタカ派、いえ、他の国ならば中道でしょうが。」

自国を守ろうとする貴族達を中心に議会を再編して与党を掌握、

自衛のため、新造巡洋艦を中核にした艦隊を派遣しました。

敵地攻撃力0。しかし、防衛力世界第二位の王国軍が、我々に牙を剥きます」

「連邦本国の指示は？」

ゲオルクの問いかけに、アルトは深呼吸した。

「連邦書記長は、副首相をはじめとする我々の軍閥の実力者を投獄しました。理由は、汚職と反乱共謀罪です」

「反乱だとお？」

「東部方面軍司令ゲオルク・シュバイツァーは、英雄的暴挙におよび、ミッドガルド連邦国に反旗を翻して王国に進軍した。それが、ミッドガルド連邦の望む筋書きです」

ゲオルク・シュバイツァーは狂ったように笑い始めた。

到着したばかりの航空部隊が、王国軍の世界最長射程の空対空ジヤベリンによって、七面鳥撃ちにされていること。

王国軍潜水艦隊と、対空戦特化駆逐艦によって、連邦海軍が追い払われた事。

王国陸軍の巨人兵が観測射撃もなしに、砲撃を命中させて、第6、第7大隊戦車部隊を壊滅に追い込んだ事。

入ってくる情報はまるで悪い夢のようだった。

「ゲオルク司令。ご決断を」

アルトが、狂笑を続けるゲオルクに、決断を促した。降伏か。王国軍との交戦か。

「アルト・シュターレン。転進するぞ」

優秀な副官は、一瞬、司令官の気が触れたかと思った。全軍に伝える。

ミッドガルド連邦国は、我らに王国への進撃を命じながら、状況を省みるや、我らを切り捨てた。

祖国を思い、故郷を思い、家族を思つて命を賭けた我らの魂を踏みにじつたのだ。

自らの保身のみに執着する無能で醜悪な指導者達は、我らを反乱軍と呼ぶ。

しかし、我は否定する。

我と諸君と、この異郷の地に故国の正義を信じて集つた、我らたちこそ、真に故国を愛する自由と正義の使徒であると！

我らは帰還する。

祖国の澱を捨て、新しき国家を打ち立てるため。

国によつて切り捨てられた命、どうか我に与えて欲しい！」

歓声があがつた。

混乱した兵士達をまるで洗脳するように、ゲオルクの声が兵士達の心を占めてゆく。

化け物だ。

そう、アルト・シュターレンは理解した。

この男こそ、禍を呼ぶ源だ、と。

だが、なればこそ、賭ける価値があるとアルトは決断する。

「アルト・シュターレン。貴様はどうする？」

「地獄まで、お供しましょう、我が司令官殿」

「連邦には、農村地帯を守るだけの兵がない。

まずは、そこから落す。さあ、長征の始まりだ！」

歓声上がる。

撤退と転進、侵攻の準備が怒涛の速度で進められる。

狂った熱気にあてられ、誰からも忘れ去られたような瀕死の魔術師を、ゲオルクは見やった。

「もしも生き延びたなら、強くなれ。」

このオレを脅かすほどに、このオレと戦えるほどに。  
そのときまで、貴様の命、預けてやる。ルドウィン・アーガナス  
ト」

それからこのことを、ルドウィンはちゃんと覚えていない。  
ただ苦しくて、寒くて、熱かった。

フローラとアザードの、自分と呼ぶ声だけが、遠くから聞こえて  
いた。

連邦兵たちが撤退したホテルの屋上。

転移してきたアザードとフローラは、必死で治癒の術をかけ続け  
た。

巨大な航空巡洋艦が、三人を迎えるためゆっくりと近づいてくる。

ある官僚がまとめたレポート・セカンドと呼ばれる報告書を参考  
に、王国とアース神族が共同で製造した新型巡洋艦。

一部光学迷彩や、魔術探查透過などのステルス機能と、旗艦性能  
に足る強力な通信機能と対空装備を供えた魔導艦。

のちに起きたヴァン神族との会戦で、超弩級戦艦スキーズブラズ  
ニルを撃沈し、その名を継ぐ事になる伝説の船。

未来の母艦に、ルドウィン・アーガナスとフローラ・ワーキュ  
リー、アザード・ノアは、こうして救助された。

これが、ブレイブダガー州州都スカイナイズを巡る攻防戦の終  
わり。

そして、王国にとっての最終戦争が幕を開けることとなる。

## 第六話 転機（後書き）

拙作をお読みいただき、ありがとうございました。

## 第七話 血戦

13

州都スカイナイブズの攻防戦で、からくもミッドガルド連邦軍を退けた王国であったが、すでに世界の天秤は抗えぬほどに破滅へと傾き始めていた。

圧倒的な軍事力と経済力で、世界の主導権を思うままに牛耳っていたアース神族が、巨人族と黒妖精族の基地攻撃によって弱体化するや、ヴァン神族とミッドガルド連邦に唆された諸国が一斉に反旗を翻し、国内に存在するアース神族・白妖精族の資産や土地を無理やりに徴発したのだ。

国際法も条約も『守らせる存在』があればこそ、はじめて効力を発揮する。

本来ならば、世界同盟がその役割を果たすべきだったのだが……。

聖暦6650年代の後半に、王国の隣に位置するナラールという小国が核術式を実験し、あまつさえ周辺諸国を「火の海にする」と脅迫したにも関わらず、世界同盟は中身の無い議長声明をあげるだけで、何の制裁も加えることができなかった。

そのため、ナラール国は危険な核兵器や、その非道さゆえ禁呪とされた術式で作成した”粗悪”な兵器を次々と増産しては、先軍主義の危険な国家へと売りさばき、世界中に核兵器や大量殺戮兵器を蔓延させてしまった。

この結果を、自称平和主義を標榜するナラール国の工作員やら、王国に野心をもつミッドガルド連邦に掌握された一部マスコミは、「戦争は起こらず平和が守られた」などとトンチンカンなことを言

って喜んで見せたが、当たり前のように凶悪な戦争の火花を撒いただけである。

そればかりでなく、無理も非道も通せば通るという「前例」を作ってしまった。

あるいは、この時、この危険なテロ国家に世界同盟主導による制裁を加え、王国内から工作団体を一掃しておけば、王国が七つの格弾道弾による爆撃を受ける事も、化学テロで数万人に及ぶ被害を出す事も、ミッドガルド連邦の侵攻を招く事もなかったかもしれない。

だが、所詮は「仮定」の話である。

完全に平和ボケした王国は、この危機にあつてさえ、国内の報道機関が他国によって掌握されている事も、国家崩壊を望む特定団体が教育界を牛耳って、偏向した教育を子供達に施していることも、全く気づくことはしなかった。

危機感を抱いたアース神族は、硬直化した世界同盟を見限って、独自の兵器不拡散機構を作ろうと動き出したが、「世界同盟はあらゆる無法を黙認する」前例が作られてしまった以上、核兵器や禁呪兵器の拡散を止めることは叶わなかった。

ナラール国と王国の隣国であり、アース神族にとって「いわゆる同盟国」であつたはずのナラール国に至っては、「我々の独自性を知るべき」などと、冗談物の言い訳で加盟を拒否、観光と工業団地開発の名目で国が傾くほどにナラール国を支援するありさまだった。

時は流れ、「七鍵計画」によって世界樹がこの世界に顕現すると、アース神族から第一位契約神器ガンギニールを奪った巨人族と、黒妖精族は、拡散して量産された大量破壊兵器や禁呪と核を用いて、アース神族・白妖精族に対し、猛然たる侵攻を開始した。

対応に追われアース神族が弱体化するや、これを好機と見たナラール国と、その黒幕であるミッドガルド連邦国は王国に核攻撃を加



え、侵攻を開始。

ナロール国もまた、これに同調した。

王国が侵略者達による占領を免れたのは、海軍の奮戦と、幸運が味方したからに他ならない。

アーク学院の生徒達105名と、ブレイブダガー州の住民が稼いだ貴重な二日間を使って、王国はなんとか交戦可能な法律を通す事ができた。

その頃には、白妖精と黒妖精の戦火は二つの大陸を焼き尽くし、ミッドガルド連邦は周辺諸国を次々に併呑した拳句に内戦状態に陥り、ヴァン神族は北方の大陸から、王国占領の為に艦隊を南下させるなど、完全な乱戦状態に入っていた。

すべては、遅すぎたのである。

王国は、アース神族の主要な同盟国でありながら、黒妖精族にそれほど嫌われてはいなかった。

巨人族も、迎撃力のみ世界最高峰、ただし敵地攻撃力ゼロの国家など、最初から視野に入れていなかった。

岩小人族は、ヴァン神族とミッドガルド連邦に支援された反政府組織と、アース神族・白妖精族に支援された政府組織、あるいはその逆の立場で内戦にあけくれ、王国に構っている暇などなかった。

人間族の国家のうち、明確に王国に侵略意思を持っていた三国の内、ナロール国とナロール国はその短期的視野から互いを相食み、ミッドガルド連邦国は侵略のやりすぎで四方諸国と交戦状態、その上、ゲオルク・シュバイツァーの反乱まで加わった。

残るヴァン神族の侵攻を王国が止めた時には、まともな国体を為している国はほとんど残っていなかった。

幸運か不運か。

王国は、ただひとつ残った「国家」として、各国の調停や難民の救助、そして、世界の「再創造」を望む、巨人族との対決の場に押し上げられたのだ。

世界樹の蔭に陣取った要塞戦艦ナグルファルとの距離が残り2,000レクスを切ったとき、巡洋艦スキーズブラズニルは、生き残った副砲三門を叩き込んだ。

白く輝く破壊のエネルギーが奔流となって迸り、黒い甲板を焼く。だが、閃光が消えると、まるで『最初から無かった』かのように無傷の装甲が見えた。

「ガンゲニールの因果律修正か」

艦橋に立つ、赤毛の魔術師、アザード・ノアは下唇を噛んだ。

再生ならば、まだ打つ手はある。再生能力を司る機関や魔方阵に損害を与えれば、停止することもできるからだ。

だが、『当たったこと』さえ『当たらなかったこと』にされたのでは、打つ手が無い。

たとえ船に積んだ時空弾頭を起爆させても、同じように因果律に干渉され、『爆発しなかった未来』を選択されるだろう。

アザードは、曇った眼鏡を拭い、掛けなおした。

そうだ。こうなることはわかっていたのだ。

姉は、ヴァール・ドナクは、絶対に自分達の上を行くだろうと。

それでも、アザードは、フローラは、ルドウインは、そんな姉の背を追いかけて続けた。

「フローラ」

「何？」

オペレーター席に座る幼なじみ、……それ以上に大切な人に告げる。

「今からでも遅くない。帰ってくれ」

「嫌。」

フローラは振り返らない。

第三位契約神器ドラグヴェンデルで空間を捻じ曲げ、降り注ぐ誘導弾の嵐をくぐって、艦を前へと進め続ける。

その姿は凛々しく、美しく、寂しく見えた。

「僕は、ハリーを、一人では残せない」

アザードにとって、フローラと同じくらい大切な、もう一人の存在。

まだ生きるすべすら知らない幼子を遺しては、逝くに逝けなかった。

「悪い親よね。戦争なんかにかまけて、一年ちよつとしか抱いてあげられなかった」

「今からでも戻れる。そして、抱いてあげればいい。一緒に生きて歩いていける」

「あの子はあたし達を憎むかもしれない。」

思い出ひとつ残さずに死んだ酷い親だって」

フローラの白金の髪が揺れて、細い背と制御盤にかけられた手が震えていた。

「でも、たったひとつ残せるものがあるわ」

巨人族は、現在という世界を書き換えるために戦っていた。

”お姉ちゃん”の創造する世界は、今の苦痛と悲しみに満ちた世界より、ずっと綺麗で美しいかもしれない。

けれど、そこに、アザードとフローラの愛の結晶たる我が子はいない。

世界は書き変わる。

巨人族が滅びなかった未来、神々が世界を制することのない世界、戦争の無かった歴史。

その新世界では、アザードやフローラが結ばれるとは限らず、息子ハリーが生まれるとは限らず、奇跡的に生まれ出たとしても、どうして同じ存在だと言えるだろう。

「アザード」

フローラは、アザードへと振り返り、極上の笑顔を浮かべて微笑んだ。

「行きましょう。」

姉さんと私たち、この10年に決着を。

あたしたちの息子の、未来を切り開くために」

アザードは、頷いた。

フローラを抱き寄せ、接吻を交わす。

二つの影がひとつとなる。

「ユミール。これが最後の戦いだ。準備をお願い」

「イエス。マスター」

いまや、スキーズブラズニルの制御コアの一部となった愛杖が、今までと同じように了解を告げて。

最終作戦が始まった。

「機動巡洋艦スキーズブラズニル。全兵装解放。

モードを『最終戦争』に変更。

対ナグルファル用時空崩壊弾発射準備完了。

チャージバレット  
弾丸装填」

アザード・ノアは思う。大好きだった姉の事を。  
ずっと4人でいたかった。それが叶わぬ願いでも。

「（姉さん。貴方はきつと理解していない。」

世界も、国も、家族も、一人ひとりの存在によって編み上げられるのだと。

姉さん、貴方が救世主として、身勝手に世界を引き裂くというのなら。

僕は、祖国の為、家族の為に、貴方と戦おう」

フローラ・ワーキュリーは思いだす。

お姉ちゃんが最後の夜、浜辺で言っていた言葉を。

苦しみも悲しみも無い、そんな世界になればいいね、と。

フローラもまた、そんな世界を姉と一緒に作りたかった。だけど。

「与えてくれなんて、いつ言っただあ……」

姉さんが理想に殉じるといふならば構わない。

ならば、フローラは、愛する夫と我が子の為に。

「姉さん、僕は」

「お姉ちゃん、あたしは」

「「貴女の理想を叩き潰す！」」

「衝角 “貫徹” 起動！」

「神技 “舞踏曲” 起動！」

弾雨に晒されながら、スキーズブラズニルは変形を開始した。  
余分な装甲、主砲福邦砲を分離し、隠されていた排気口に灯がと

もる。

推進翼たる光の帆は、残光を帯びて輝き、弓状の翼が胴体から伸びた。

艦首は二又に分かれ、中央に花の蕾を思わせるような巨大な衝角を形成する。

三基のジェネレーターに直結した、巨大なリボルバーに装填された弾頭から、衝角へとエネルギーが充填される。

王国が管理する、”破滅”を担う、ルドウインの第一位契約神器レヴァティン。

アース神族から提供された、”運命”に介入する第一位契約神器ガングニールの解析データ。

そして、交戦したヴァン神族や巨人族から得た、第一位契約神器ブリーシンガメンとミヨルニルの戦闘データ。

これらを研究して作られた、すべてを虚無へと還す、ギヌンガガツプ究極魔道兵装だ。

荒れ狂うエネルギーの奔流に、バイパスが耐え切れずに破砕し、船体もまた自壊を始める。

だが、壊れ逝くアザードのスキーズブラズニルを、フローラのドラグヴェンデルが支える。

要塞戦艦ナグルファルは、ガングニールから与えられた無限の魔力を利用して、数え切れない砲撃と誘導弾を浴びせかけた。

だが、沈まない。砲塔がもげ、甲板がひしゃげ、装甲が削り落とされ、それでもスキーズブラズニルは前へと進む。

背負うものがあるから。大切な人がいるから。

残る距離、1,000レクス。

ナグルファルが、因果律に干渉し、スキーズブラズニルを排除しようとする。

だが、虚無の衝角は、因果律の修正さえも、”無”へと還す。

900・800…600…200・100・

天をかける白い帆船が、巨大な黒い要塞戦艦の横腹を貫く。

「撃て

！！」

その叫びが、アザードのものだったのか、フローラのものだったのか、わからない。

スキーズブラズニルの艦首衝角から、華が開くように巨大な魔方阵が幾重にも展開し、撃ち出された流星を思わせる破壊の奔流は、ナグルファルを完全に飲み込んだ。

同時に、スキーズブラズニルの船体は真つ二つに折れて、爆散した。

気が付くと、アザードとフローラは抱き合ったまま、深い森の中にいた。

「ここって、神社？」

「慰霊神社、だね。」

忘れるはずも無い。

あの州都スカイナイブズの攻防戦、そして、今回の戦いの前にお参りした、護国の英霊を奉った神社だ。

そこでは、懐かしい戦友たちが待っていた。

「よ！ お二人さん、相変わらず熱いねえ」

ソバカスと短く刈った赤毛が印象的な級友、テリー。

「……」

無言で敬礼する、アザードたちがお世話になった、スキーズブラズニルの前艦長。

国を、家族を、友人を、守るために生きた、皆がそこにいた。

「また、会えたね」

「うん。また、会えた」

二人は歩き出す。手を繋ぎ、懐かしい人たちの元へ。

思い残したことは多く、未練も数え切れない。

だけど。

「命は続いていくから」

「うん」

血は、息子に。

意思は、友に。

自分達が、彼らと同じ、守りたいという意味を継いだように。

だから、あとは。

「任せたよ。ルドウィン」



## 最終話 新世界

14

戦った。

闘った。タタカイ続けた。

望んでいなかったにも関わらず。

そんな、長い、長いユメを見ていた。

「起きろルドウィン、学校へ行くぞ！」

もう冬だというのに、窓が全開に開けられて、北風がビュービューと部屋に吹き込んでくる。

急激な室温の変化に戸惑う暇も無く、寝ぼけ眼のルドウィンは、2Fベランダからの闯入者にベッドから蹴り落とされた。

「ね、姉さん。そこは入り口じゃない」

「む？ 気にするな」

ひとつにくくった長い鳥羽玉の黒髪を翻して、少女は薄い胸を張り、朗らかに笑った。

ルドウィンが姉と呼ぶ少女、ヴァール・ドナクは、5年前にお隣に引っ越してきた、遠国からの留学生だ。

別に義理の姉というわけでもないのだが、何かと引っ張りまわされるうちに、いつの間にか姉と呼ぶようになっていた。

「早く早く、急がないと遅刻だぞ！」

急かされるままに歯を磨き、顔を洗って着替えると、ヴァールが1Fで半焼けのトーストとチーズを用意してくれていた。

朝食を牛乳で喉に流し込み、ルドウィンはヴァールが荷台に腰掛けて待つ自転車に飛び乗って、山の上にある学校へ向かってこぎだした。

走る。走る。心臓破りの坂を、二人乗りで駆け上がる。

「思うんだけどさっ。」

「なんだ？」

息も絶え絶えにルドウインは叫ぶ。

「姉さんがこいだほうが絶対速いようなんっ」

「何を言う。男だろうが」

そりゃそうだが、走るスピードも持久力も、怪物じみた姉の方がずっと上だ。

「それにこうすると、暖かいだろう？」

姉が上半身を前へ向けて、ルドウインの背にしな垂れかかる。

その体温は暖かくて、どこかほっとして、少しだけ胸が熱くなつた。

「役得？」

「フローラの方が柔らかかった。……って、姉さん！？ 暴れないでっ落ちるっ！？」

「ということがあったんだ」

「そりゃお前が、空気読めてないんじゃない？」

ところで、ルドウイン、今日はその幼なじみ達はどうした？」

午前中最後の授業、体育教師のクリストファ教諭にしごかれて、ぐったりとしたルドウインは、学食で級友のテリーを前に、うどんをすすりながら愚痴っていた。

「あっち」

「あっち？」

ルドウインの指差すほうを見て、テリーはなるほどと納得した。フローラが弁当箱から黒焦げの卵焼きを箸で摘まんで、アザードに向けて「あゝん」なんてやっている。

「あゝ、気持ちわかる……」

「だろっ？ 誰だ、幼馴染は兄妹みたいな感覚だからひつつかない、なんて言った奴は。」

俺の立つ瀬がないぞこんちくしょー！」

「そういうのって、あくまで一般論から。」

ルドウィン、お前、ヴァールさんのことはどう思ってるんだ？」

「姉さん？ 姉さんは姉さんだろう？」

「納得。色気の無い反応をありがとう。」

ん、もう食べ終わったのか？」

「ああ、トレーを返しに行ってくる。テリーは？」

「俺は野暮用があるからな。そうだ。こいつをやるよ。」

テリーが、まだ手のつけていないサンドイッチを、ルドウィンに押しやった。

先ほどの愛妻弁当の件が脳裏をかすめて、ルドウィンは苦笑する。

「男に貰ってもなあ」

「そう言うな。お前には一度、ご馳走したかったんだよ。覚えてるか？ 俺は料理人になるのが夢なんだ」

「ああ。忘れるわけ、ない。この味も、きっと」

ルドウィンは去り、テリーは彼の隣で小さなランチプレートを食べていた少女に声をかけた。

「で、どう、コードウェルさん。あれから進展はあったのかい？」

「それが、私、目立たないみたいで」

影の薄い三つ編みの少女、エリス・コードウェルは目を伏せた。

「もう少し、強気になった方がいいかもなあ。あいつ、鈍感だし」

「うん」

ルドウィン・アーガナストは、どんぶりを載せたトレイを所定の場所に片付け、食堂を見渡した。

食堂に備え付けられた大型のモニターでは、売り出し中のジャーナリスト、マリー・キャリングが北方の国取材していた。

先ほどから流れるニュースは、動物園で赤ちゃんが産まれたとか、

経済がどうのこうのとかそんな日常的な話題ばかりだ。

それでいい、それでいいのだと思う。

ふと、ネガティブな言葉を思い出した。アザードだっただろうか？  
王国の自殺者は年に3万人に達していたのだという。理不尽なまでに競争化を進める社会。その血税を利権として吸い込む大量のODA。流入する強盗団や、金目当ての犯罪者。それを支援する団体や組織。

国外に目を向ければ、公害を撒き散らし、森林を伐採し、砂漠化を進め、土地を無理やり徴発しては、一日に200件を越す小規模な反乱が起こる連邦共和国。王国の民間人を拉致した軍事独裁政権。国内法は批准した国際法に優先されると断言する指導者を戴き、幾度も国際法を踏みにじった隣国の民主国家。

学校ではまだ見ていない、金髪の女性が叫んでいる。我々は戦争を起こす力すら無く踏みにじられている、と。

さて、これらは悲劇ではないとでも？

「ルドウィンさん」

「ん？」

気がつけば、ルドウィンの制服の裾を、小さな女の子が掴んでいた。

「ごめん、すぐどこから」

らしくもないことを考えていたから、と、ルドウィンは慌てる。

「ううん、違うんです。お姉ちゃんから伝言です。」

帰りは、皆で商店街に行こうって」

「うん、わかった。って、君は？」

姉に比べ、少しだけ背が小さくて、どこか柔らかな雰囲気少女は微笑んだ。

「ノーラ・ドナク。お姉ちゃんの妹です」

ノーラの言付けに従って、ルドウィン、アザード、フローラは、商店街へと繰り出した。

「この服可愛い」

「いや、このコートもいいぞ」

洋服店に入ったが最後、こうなるのは目に見えていたわけで。

「弱ったなあ」

所在無く、立ちつくしながら、ルドウィンがぼやく。

「ルドも、不景気な顔をしなくても。」

新しい服を着たら、どんなに綺麗だろう、どんな印象を見せてくれるんだろうって、うきうきしてこないか？」

「彼女持ちの意見だなあ」

「そうでもないって。僕達も適当に探そう」

「それはいいんだけど、多分買えないと思うぞ」

アザードが、眼鏡の奥で目をぱくりさせている。

「どうして？」

そこに、黒い竜巻と、白金の嵐が来襲した。

「ほら、アザ、これ持って！」

「ルド、頼んだぞ！」

色違いの豪風が残っていたのは、大量の荷物。

「姉さんとフローラだぞ」

「忘れてた。思い出さなかった」

なんか泣き崩れているアザードと一緒に、よいせと服を運んだり、喫茶店で珈琲を片手に喋ったり、それはそれで楽しい放課後だった。

そして、黄昏の時間がやってくる。

ルドウィンは、アザードは、フローラは、ヴァールは。

家の近くの森の泉で、湖面を見つめて過ごしていた。

「そろそろ、お邪魔かな」

アザードが、赤い長髪を揺らして立ち上がった。

「そうね。今日は久々に楽しかったわ。」

でも、もう二人の時間よ」

フローラが、ウエーブのかかった髪を風になびかせ、微笑んだ。

湖面は夕日を照らし、黄金に輝いている。

あとは任せたよ。ルドウィン。

「ああ、任しとけ」

言葉は尽きず、ただ万感のオモイを込めて、二人の背を見送った。

「なぜだ？ ルドウィン？」

ヴァールの声は湿りを帯びていた。

「これはお前が望んだ世界なのに」

「そして、もう失われた世界だ」

ルドウィンは泣きたかった。

これは自分が持つ幸せな記憶だ。

姉の夢見た幸せな世界は、姉自身には無く、ルドウィンの思い出の中にあつた。

それが、酷く悲しくて、せつなかった。

「ノーラちゃんに会ったよ。」

いい子だった。

お姉ちゃんを憎まないでって。

馬鹿だよな。この俺が、姉さんを憎むわけないのに」

むしろ、ルドウィンが憎むのは自分自身だ。

この運命を、この結末を、招いてしまった己の弱さだ。

姉の記憶は血の色に染まり、心は乾ききっていた。

国を奪われ、家族を奪われ、すべてを踏み潰された慟哭だけが、

彼女の世界だった。

幾千、幾万の屍を越えて、砕かれ、引きちぎられた心を縫い合わせ。

この先には幸せがあるのだと、喪われた物を取り戻せるのだと信じて、傷だらけの素足で歩き続けた。

いつか願いが叶うと、そう信じて。

そうまでして求められた彼女の幸せを、失われた命を、今自分は切り捨てようとしている。

「（何が神剣の勇者だ。何が救世の英雄だ。俺は、俺は！）」

「

それでも、譲れぬ誓いがあった。守りたいと思った人たちがいた。この黄昏の刻を生き残った者達。彼らが得たちっばけな幸せを、未来に芽吹こうとする生命を。

過去の願いで塗りつぶしていいはずがない。

ルドウィンもまた、ヴァールと同じだ。

生かされて、救われて、今ここに生きている。

その果てとして、為さねばならぬ使命がある。

たとえその結末が、決して望まぬものだとしても

。

「ルドウィン、お前達がいたから、私は得られた。

温もりを、幸せというものを。

だから、世界を救いたいと思った」

「姉さん、俺は貴方の強さに憧れた。

どんな苦境でも、貴方のまっすぐな背中が俺たちを導いてくれた。だから、世界を守りたいと思った」

ヴァールは微笑む。慈愛に満ちた瞳で義弟を見つめる。

ルドウィンは笑う。朗らかに、涙のにじんだくしゃくしゃの笑顔で義姉を見つめる。

「愛している」

「愛してるよ」

だから、だからこそ。

「ガングニール！」

「レヴァティン！」

黄金の湖のほとり、吹き付ける風と舞う木の葉の中で、相対する二人。

ヴァールの腕には銀の穂先もつ黒き槍が抱かれ、ルドウインの手には輝く白い長剣が握られた。

ここが決着。

世界の運命は分かれ、今、選択される。

「世界創造

ヴァールハラ  
”天獄”」

ヴァールが、ガングニールを掲げ、叫ぶ。

その瞬間、湖面は割れ、大地は裂け、空は千切れた。

埋め尽くすのは、崩壊する空間を埋め尽くすのは、槍、槍、槍。

虚数空間、可能性の未来と過去より召喚された、数え切れないガングニールがルドウインに向かって飛ぶ。

ルドウインは、9面からなる盾のようなものを展開し、しかし物量と『外れず』の神性の前に貫かれた。

「（本当にいいんだな、盟約者）」

「ああ、相棒、これがきつと、俺の最後の戦いだ」

炎が閃く。

ルドウインが持つ剣は、すでに剣のカタチを為していない。

神話において、叛神が鍛えた巨人王の神器。



剣とも杖とも呼ばれたかの武器の真の姿は、世界樹の敵  
即ち、焰だ。

「今まで戦った長剣は、レヴァティンを封じた9つの箱……それこそが真の姿か!?」

ヴァールは見た。

拘束を解かれ、荒れ狂う焰が、箱という盾を破って飛来するガン  
グニールを焼き尽くすのを。

だが、それがどうした?

もはや大勢は決している

!

「ルドウィン。私は今、世界を掌握した。この無限大の力を前に、  
なお抗うか!?」

少女には何もなかった。

絶望と辛苦と血涙だけが記憶のすべてだった。

けれど、それは3人の少年少女との出会いによって一変する。

温もりを得た。日常を得た。拠り所となる夢を得た。

そうして、数多の戦場を越えて、遂に彼女は辿りついた。

始原の巨人を殺め、その屍から九つの世界を創りあげた神々の王  
の力に。

「姉さん、無限じゃない。もう無限じゃないんだ。

たとえ、幾千幾万幾億の槍を相手取ろうと、そのことを打ち払  
うまで!」

少年は平凡だった。

父と母と友人に恵まれ、かけがえのない日常を謳歌していた。  
でも、出会ってしまったのだ、一人の少女に。

彼女は強く優しくかった。誰かの力になれる、彼女のような存在になりたいと憧れた。

そのオモイは、育まれ、鍛えられ、遂に彼は辿りついた。

世界樹を焼き尽くす終焉の力、創生を終わらせる巨人の王の力に。

「やあああああああああつ！！！！」

「うおおおおおおおおおつ！！！！」

降り注ぐ雷雨の如きガングニールを、ルドウインはレヴァティンで焼き払った。

背に焰の翼、両手両脚に焰の剣、否、焰とは無形だ。あらゆる形に姿を変えて、万象を貫く神槍の弾幕を飲み干してゆく。

ああ、と、ヴァールは理解した。

このままでは勝てない、と。

無限物量で押しつぶせば、勝てると確信していた。

だが、ナグルファルを失った今、彼女の魔力は無限ではない。

ならば、彼と同じ窮極の一たる自らの武器で戦うまで。

焼き払われ、消失してゆくガングニールの魔力の残滓。

今なお世界によって召喚され、生み出され続けるガングニールの魔力。

幾先幾万幾億の魔力をひとつに束ね、天地を貫く巨大な神槍を創りあげる。

「ルドウインンッ！！」

「姉さんんっ！！」

ヴァールは感じた。

ノーラが、父が、母が、ともに戦い、散っていった戦友たちが、

その背を押してくれるのを。

ルドウインは想った。

アザードが、フローラが、多くの戦友たちが守り抜いた、命のきらめきを、その重さを。

たがいに守るべきものがあつた。

だから、この決着はどちらが正しかった、ではなく

。

15

あかい夕焼けが目に染みた。まるで、世界が燃えているようだ。不沈と畏れられた要塞<戦艦>も沈み、死神と懼れた自らもまた消える。

神々でさえ、不死ではいられないのだ。ならば、この結末もまた、道理。

巨神槍ガングニールの突進は、焰レヴァティンの翼によつてかわされ、半ばから焼き切られた。

ヴァールは想う。遠い昔、自分の背を追いかけていた、大切な三人の幼馴染のことを。

旅立ちの時、彼女は残した。

ひとりには、災いを穿つ杖を。

ひとりには、身を守る武具を編む道具箱を。

ひとりには、空を翔ぶ翼を。

そして、10年の時を経て、与えられ、追いかけるだけだった少年達は。

「越えたのだな。私を」

ひとりでは及ばず、二人でも叶わない。  
けれど、三人ならば、自分に並び、自分に打ち勝った。  
ならば、いい。もう十分だ。十分に満たされた。

「なあ、ルドウィン。」

私は知っていたんだ。戦争だけが悪ではないことを。  
でも、他に道はなかった。悲しみも苦しみも無い世界。  
それだけが、欲しかった」

「姉さん」

もうあかい夕焼けも目に入らない。

痛みも、苦痛も無い。

ただ、自分を抱く弟の存在に安堵した。

「ルドウィン。人は悲しみや苦しみに負けるばかりじゃないって、  
信じられるかい？」

「ああ。姉さんがそうだったように。俺達は強くなるって、悲し  
みや苦しみに負けないようにって思えるから」  
「そうか」

彼らは証明したのだ。

人は巨大な力に怯えるばかりではない。

手を繋ぎ、同じ方向を向いて、共に生きて、共に足掻いて、共に  
強くなれるのだと。

意味はあった。

願いは叶えられずとも、願ったものは勝ち得た。

「どうしてだ？ どうしてこんなことに」

槍だけを叩き斬ったのだと、優しい弟は信じて疑わなかっただろう。

「最後まで共にあること。それが我とガングニールの契約だから」  
嗚咽が聞こえる。本当に、いつまでも子供で、可愛いおとうと。

「行け。まだ終わってない。」

全ての鍵と、扉を砕くのだろう？

お前の望みを叶えて来い。

こんなところで泣く弱い子に、育てた覚えはないぞ」

声が、掠れる。

足の爪先、手の指先から、肉体が消えてゆく。

砂のように零れ、風の中に溶け。

「幸せに                      ぞ？」

最後の時。

ただひとりの義弟に、生涯最高の微笑みを残して、最強の魔術師は逝った。

ルドウインは歩き始める。

土くれの荒野を、天へと伸びる巨大な世界樹へと向かって。

ボロボロと、ボロボロと、灰のようになった身体を風に奪われながら。

「（盟約者。オレはアンタに感謝している。

七つの鍵と世界樹が悪用されぬよう、滅ぼす為の対抗存在として、オレは生み出された。

だが、そんな契約を呑む者は、アンタ以外にいなかった）」

ルドウインの手に渡るまで、生み出された使命も果たせずに、ただの殺戮兵器としてレヴァティンは各国を渡った。

誰もが、願いを持っていたから。誰もが、欲望を持っていたから。ルドウインとて同じ事。ただ、彼は世界樹が生み出す悲劇が許せなかっただけ。

「（アンタが最後の勝者だ。

願いを叶えろ。オレの呪いに蝕まれた身体を治して……

赤毛と口うるさい嬢ちゃんと、いいや、アンタが望む人たちを生き返らせる。

その資格が、アンタにはある）」

七つの鍵を止めるため、世界樹を止めるための魔剣レヴァティン。親殺しとも言えるこの神器には、ある呪いが掛けられていた。真の姿を顕現したとき、盟約を交わした主を焼き尽くすのだ。ルドウイン・アーガナストは消える。

神話において、世界を滅ぼした黒の名を持つ巨人王と同じように。

「相棒。きつと誰にもないんだよ。

誰かの運命を捻じ曲げる、資格なんて、さ」

ルドウイン・アーガナストの下半身は黒い灰となって、風に吹かれて消えていた。

彼が姉から受け継いだ、炎の翼が、彼をなんとか低空に立たせていた。

「相棒。短いつきあいだったけど、楽しかったぜ。ありがとうな」

ルドウインは、残る命を振り絞り、世界樹へと向け焰を伸ばした。

「終わりの太刀                      ” 始まりの焰”<sup>ムスベル</sup>」

成層圏にまで達する、長い長い火の柱が、世界樹を貫く。  
崩壊する。すべての願いを叶える存在が、炎に燃えて消えてゆく。

「（盟約者。それが相棒の願いなら、必ず叶えよう）」

16

エレキウス・ガートランド（s c 6 6 4 3 - s c 6 7 1 5）

ガートランド王室の曾孫。

州都スカイナイズ攻防戦において、有力議員だった叔父とともに、艦隊派遣の交渉に携わったとされる。

神焉戦争勃発後、軍に仕官。

世界人口の95%が失われたs c 6 6 6 5に、わずか22歳の若さで王国軍元帥に就任。

ヴァン神族、巨人族らの猛攻から王国を守護した。

世界樹消滅後も、王国軍を指揮して混乱した世界の維持に努めた。

s c 6 6 8 0に政界に転身、s c 6 6 9 5宰相に任ぜられ、王国復興を志す。

生涯王位に就くことは無く、死後百年後に、その功績を称えられ『救世王』と贈り名される。

クリストファ・シェリング（s c 6 6 3 4 - s c 6 6 8 4）

白妖精族の傭兵。

州都スカイナイズ攻防戦において、アーク学院有志百五名と共に

に、ミッドガルド連邦国の侵略を食い止めた。

神焉戦争勃発後、傭兵として各地を転戦。

白妖精族の大陸が消失したs c 6 6 6 5に、王国が派遣した救援部隊に同行、その後傭兵隊長として従軍。

戦後は王国に帰化。最終階級は中将。

アリョーシャ・マスハドフ（s c 6 6 3 9 - s c 6 6 6 6）

ヴァン神族出身のテロリスト。

大国に制圧された小国の出身であり、巨人族、黒妖精族を中心に組織された武装集団”虐げられし者たち”の一員として、ヴァン神族と戦った。

s c 6 6 6 6にヴァン神族の女王、ミーシャ・ウラジミールの暗殺に失敗。

その後の消息は不明。

州都スカイナイブズ攻防戦において、アーク学院有志百五名を援護したという情報もあるが、真偽は不明である。

ゲオルク・シュバイツァー（s c 6 6 3 2 - s c 6 6 8 5）

ミッドガルド連邦反乱軍主席。

s c 6 6 6 3年に王国へと侵攻し、州都スカイナイブズを陥落寸前まで追い込むも、王国軍の参戦によって軍を撤退させる。

その後、侵略の罪を着せた連邦首脳部に反旗を翻し、防衛戦力の少ない農村部を中心に攻略、恐怖政治を敷いた。

世界樹消滅後、最大規模の軍閥として大陸西部を支配、その強引かつ硬直した政策を批判されるや、中心となった知識人に徹底的な弾圧を加えた。

また鉄釜、農具まで供出させ、鉄鋼の大増産を目指した製鉄を農村で展開して失敗、資源を浪費したばかりか、農業そのものの基盤



を破壊してしまった高飛翔政策など、経済や生態系を無視した政策を強行、大勢の餓死者や人工災害を生み出した。この失敗から政治的影響力が後退すると、自身の神格化を進めて私兵集団による潜在敵対勢力の粛清、超越革命を断行する。

内乱と政策、革命による死者は8000万人から一億人にのぼり、神焉戦争後、最大の大量殺戮者として歴史に名を刻む。

自身の復権を目指した超越革命は、民主化勢力を糾合した抵抗軍によって失敗に終わり、5年の内乱の後、彼の戦死によって決着した。

なお、sc6680から五年間に及ぶ西部事変で、後の王国宰相エレキウス・ガートランドが極秘裏に介入したという噂があるが、王国は否定している。

のちに、西部連邦共和国によって名誉回復され、『建国の父』と贈り名される。

アルト・シュターレン（sc6641 - sc6709）

ミッドガルド連邦反乱軍副主席。

ゲオルク・シュバイツァーの副官として州都スカイナイズ攻防戦に参加。

彼が連邦首脳部に反旗を翻した後も、右腕として補佐し続けた。豪胆かつ強硬なゲオルクと対照的に、穏健かつ柔和で、外交および内政に積極的な役割を果たす。

高飛翔政策、超越革命においても、可能な限り被害拡大を止めようと尽力、餓死を免れた人民や破壊を免れた文化財も少なくない。だが、彼は飽くまでブレーキ役に過ぎず、政争の最中、自身の愛娘が惨殺されようと、ゲオルクの妄執に付き従うしかなかった。

sc6685西部事変終結後、故郷に戻り、一軍閥の長として生涯を終える。

ゲオルクが旧ミッドガルド連邦の強さの象徴なら、アルトは優し

さの象徴であると呼ぶ風潮もある。

アザード・ノア（s c 6 6 4 3 | s c 6 6 6 6）

ガートランド王国軍人。

州都スカイナイズ攻防戦において、アーク学院有志百五名の指揮を執った。

神焉戦争中、最も戦果をあげた魔術師の一人であり、契約した神器から『魔砲使い』の異名で呼ばれた。

s c 6 6 6 4 のヴァン神族との会戦、s c 6 6 6 5 の白妖精大陸アルヘイム救援戦など、名だたる戦場で名声をあげる。

s c 6 6 6 5 の白妖精大陸救援戦後、黒衣の魔女に中破された巡洋艦スキーズブラズニルの艦長となり、巨人族との決戦に赴く。

s c 6 6 6 6 世界樹消滅時に、妻のフローラ・ワーキュリー・ノアと共に戦死。慰霊神社に奉られる。

フローラ・ワーキュリー・ノア（s c 6 6 4 3 | s c 6 6 6 6）

ガートランド王国軍人。

州都スカイナイズ攻防戦において、アーク学院有志百五名の一人として参加した。

神焉戦争中、最も戦果をあげた魔術師の一人であり、契約した神器から『空間の支配者』の異名で呼ばれた。

s c 6 6 6 3 にアザード・ノアと結婚、s c 6 6 6 4 のヴァン神族との会戦後に、一児ハリーを儲ける。

c 6 6 6 5 の白妖精大陸救援戦後、軍に復帰、巡洋艦スキーズブラズニルの乗員として、巨人族との決戦に赴く。

s c 6 6 6 6 世界樹消滅時に、夫のアザード・ノアと共に戦死。慰霊神社に奉られる。

遺児ハリーは、二人の同僚であったエリス・コードウエルの伝手

で、エリン家に養子として引き取られた。

ルドウィン・アーガナスト（s c 6 6 4 3 | s c 6 6 6 6）

神剣の勇者。

州都スカイナイズ攻防戦において、アーク学院有志百五名の一人として参加した。

神焉戦争中、最も戦果をあげた魔術師の一人であり、無敗を誇る巨人族の魔術師、黒衣の魔女<sup>テラ</sup>を討つて、世界を救った男。

s c 6 6 6 5の白妖精大陸救援戦において、七つの鍵のひとつ、破滅の剣、レヴァティンと契約する。

s c 6 6 6 6世界樹消滅時に生死不明で消息を絶つ。

世界平和に尽力した人類の救世主であった為か、世界同盟名義による葬儀が行われたものの、慰霊神社に奉られることはなかった。

この理由について、慰霊神社社主も、彼の級友であり、司令官でもあったエレキウス・ガートランドも生涯口を閉ざし、真相は不明。人類を守護し、死亡するという英雄的行為から、各種マスコミによる神格化報道が行われ、現在の追跡調査は困難を極めている。

彼は本当に人類全体の救済を目指した、救世主だったのだろうか？それとも家族を守り、友を守り、故郷と国を守るために戦った愛国者だったのだろうか？

あるいは、もっと他に別の理由があったのだろうか。

今では一笑に付される通説に、神剣の勇者と黒衣の魔女が恋仲だったというものがある。

巨人族を率い、黒妖精族やヴァン神族を扇動し、世界支配を狙った最凶最悪の魔女。

何億という無辜の民を虐殺し、幼い少年少女の生き胆や心臓を儀式に使い、捕虜を魔術の実験と称して惨殺した。

そんな黒衣の魔女のイメージからは、世界的英雄である神剣の勇

者とつりあいが取れるはずもない。

だが、奇妙な事がある。つじつまがあわないのだ。

各国、特に西部連邦共和国が公表した被害者数は、当時の一級資料と明らかに矛盾している。

都市人口以上の人口を一晩で虐殺したり、黒衣の魔女が別の戦場で戦っていたにも関わらず、被害が出たとされる都市が多すぎる。

今回の追跡調査において、私は深い疑問を抱かざるを得ない。

神剣の勇者は、本当に世界救済の為に戦った、品行方正な英雄的青年だったのか。

黒衣の魔女は、本当に世界支配の為にあらゆる邪悪を行った、最悪の魔女だったのか。

真実はすでに歴史の中に消えた。

だが、それでも私は、曾祖母が生きた神焉の時代を求めたいのだ。

王国暦（k c）12年。

パリーヴァス・ポスト記者。

アナベル・キャリングのメモより。

17

聖暦（s c）6671年。

世界樹の消失から5年がたった。

世界は相変わらず混乱していて、收拾がつかない。

9つの大陸のうち8つが消滅し、人口はかつての20分の1に過

ぎない。

軍隊と警察機構が存続する王国はまだマシだ。

各地は、力だけが支配する無法地帯と化していた。

盗賊。私兵軍閥。労働力と食料を狙い、跳梁する悪鬼ども。

働き手を失った田畑は荒れ果て、電力・魔力のプラントも、そのほとんどが停止している。

だが、そんな世界でも、人々はもういちど立ち上がろうとしていた。

かつて、州都スカイナイブズと呼ばれた都市。

空路の要衝として栄えたこの町も、今では放棄されたスラムと、小さな田園が広がっていた。

妙齢の女性が一人、子供達に混じって、稲の水を替えていた。そこに杖をもった青年が、焚き木を背負ってやってきた。

「師匠。芋とカボチャ畑の蔦が伸びてます。

山の猿やイノシシの対策も、去年よりうまく行ってますし、今年の冬は越せそうです」

「良かった。今年は、稲も実りそうだし、秋には、芋鍋なんてしたいわね」

「はい」

魔術師ロウ・バートンは、田の稲を世話する師に報告すると、再び畑へと戻った。

エリス・コードウェル。この町を守った、アーク学院有志105名のただ一人の生き残りだ。

ロウの師匠であり、彼があこがれてやまない恩人、神剣の勇者の戦友でもある。

今でも、あの掌を忘れない。

『信じていい?』

『任せる。男と男の約束だ』

連邦軍に捕らえられたロウの姉を、まだ新兵に過ぎなかった彼は見つけると約束し、敵総司令部から救出してくれた。

その時から、ルドウィン・アーガナストは、ロウ・バートンにとって英雄になった。

彼のようになりたいと、魔術を学び、自らを鍛えた。

いつか、誰かを守る、誰かの力になれる、そんな魔術師になるために。

神剣の勇者は死んだのだと、誰も彼もが美談にする。

救世の英雄。命がけで悪を討ち、世界を守ったヒーロー。

「あのひとが死ぬものか」

世界樹を巡る神焉戦争は確かに終わった。

けれど、今の世界は、平和というにはほど遠い。

勇者の出番は、終わってなどいないのだ。

だから、追いかける。

ヒーローになれなくてもいい。

彼が守ろうとしたもの、彼が愛したこの国を、もう一度強く豊かにする。

それが、それこそが、ロウが自らに課した誓い。

焚き木を運び、畑の草を刈り、井戸の修繕をする。

魔術師は『力』持つ者だ。

人より強い『力』を持つ者は、より強い『責任』が求められる。

「警備隊長。お耳に入りたいことが」

「なんだ？」

屋根の修繕をしていると、宿屋の息子が同じように金槌を打ちながら横に並んだ。

「昨夜から、流れ者らしい男が泊っているんですが」

「何か問題でも起こしたのか？」

「いえ、それが特に暴れるわけじゃないのですが、慰霊碑に参りたいと」

「……」

州都スカイナイズ攻防戦の死者を祀った碑が、空港の跡地に建てられている。

だが、特に観光の名所というわけではなく、管理者の居なくなつたプラントから金品を漁り生計を立てる流れ者が行くには、不自然な場所だつた。

「どんな奴だ。一応注意して……っ!？」

その時、ガンガンと、非常事態を告げる鐘が鳴る。

「何事だ!？」

「隊長! モンスターです。モンスターが出ました!」

「ちいつ。今行く!」

ロウは屋根から飛び降り、靴から火を噴出して滑空した。

戦争終了後、放棄された生物兵器プラントや神器生成プラントは、未だに魔術兵器を生み出している。

そして、メンテナンスもなく、狂つたプラントは神器ではなく、コントロール不能な怪物たちを量産し、地上へと撒き散らしていた。

「迎撃体勢を取れ! 早く!」

ロウは叫び、杖から火球を生み出して、空から襲い掛かる墮竜めいた怪物に対空砲火を浴びせる。

警備隊の若衆が手製の弓を構え、次々と矢を浴びせる。

だが、届かない。当たらない。

たとえ掠めたとしても、神器には己を護る本能がある。

変じた怪物たちも同様に、魔術的な障壁を張って、矢の軌道をそらしてしまう。

もはや人類には、まっとうな銃や弾丸すら残されておらず、自らが生み出した怪物を前に、為すすべもなく狩られていった。

「術式      ” 荒魂 ”      起動！」

ロウの杖から膨大な焰が噴出し、墮竜を包み込む。

ギエギエと悲鳴をあげる墮竜に、巨大な火球を叩きつけ、撃ち落とす！

「地上からオーク型生物兵器が一個小隊接近。

空から再びドラゴン型墮神器が五機、来ます！」

「町への侵入を食い止める！」

だが、襲い来るモンスターを前に、警備隊の兵力は明らかに不足していた。

二匹の墮竜が防衛線を突破し、町へと侵入する。

「やめろ、あそこには皆が！」

一匹の墮竜を相手取りながら、ロウは見た。

自分の師が、人々を逃がしながら、杖を構えるのを。  
だが、無理だ。



彼女の専門はあくまで通信と探索能力。

魔術師として強力無比な支援能力を持つが、戦闘には耐えられない。

彼女の後ろでは、戦うすべ持たぬ子供達が、泣きながら逃げ惑っていた。

その更に後ろには、冬を越すための食料を育てる田畑があった。終わる、終わってしまう。

命が消えて。

「誰でもいい。誰か、助けてくれ！」

「お願いっ。防いで！」

エリスの張った盾の障壁が、墮竜の爪によって、紙細工のように引き裂かれた。

神器を持たぬ魔術師が、神器を所持する魔術師に、あるいは神器そのものに叶うはずがない。

それは、この世界における魔術の常識であり、それを乗り越えられたのは、ごく一部。

たとえば、彼のような。

任された。

「え？」

槍が伸びた。墮竜の爪をそらし、返す刀で、喉元を一撃。

激怒して、振り回される尻尾を、まるで棒高跳びのようにトリッキークーな跳躍でかわす。

中空に跳びながら、握りこまれたのは、焔に包まれた拳。

誰ともわからぬ影は、その一撃を墮竜の眉間へと叩きつける！

「熱止！」

全身にルーンを刻まれて、墮ちた神器の化身が爆発する。

誰ともわからぬ影？

そんなはずがない。

エリスは、知っていた。

ロウは、知っていた。

槍を手に墮竜と渡り合い、炎の魔術を使う男を知っていた。

「「ルドウィンっ！！」」

久しぶりに、懐かしい名前を聞いた。

青年は、槍を手に、両の脚で地を駆けける。

はぐれモンスターの襲撃にしては、組織立っている。

どこかの野盗か軍閥の魔術師がけしかけてきたのかもしれない。

まあ、そういうのを考えるのはあとにしよう。

今はこの危機を乗り越える。

そうだ。

終わらせるものか。

悲しみで、終わらせなどはしない。

アザード、フローラ、テリー。死んでいった仲間達。  
姉さん、ノーラ、アリオシャ。今はいない、かつての敵たち。  
彼が、彼女が、夢見ただろう幸せな世界をとりもどす。  
その為に、牙なき者の牙となろう。

世界は悲しみと苦しみに満ちている。

だから、それを受け入れられない弱い人間は足掻くのだ。  
幸せを求め、よりよき未来を作ろうと！

「いつか、届くさ。そうだろう？」

歪められた運命を正し、世界樹と共に消えた相棒へと問いかける。  
背が熱い。

力を込めて、炎の翼を広げ、ルドウィン・アーガナストは羽ばたいた。

これが神話の終わり。そして、伝説の始まり……。

七つの鍵の物語 神話 FIN

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2373d/>

---

七つの鍵の物語 - 【神話】

2010年10月8日14時16分発行